古代アンデス文明の神殿と国家

渡部　森哉*

南米アンデスは一次国家が成立した場所の１つである。国家形成メカニズムを説明する必要があるが、旧世界の事例を基に組み立てられてきたモデルをそのままアンデスに当て嵌めようとしてもうまくいかない。その１つの理由は文明（社会の大規模化・複雑化）の証拠である神殿の誕生から、最初の国家の成立まで3000年以上もの時間があることである。

本論文では、アンデス形成期（前3000–50年）における神殿の特徴を概観し、その後成立した国家社会の都市的大規模遺跡（センター）における神殿の役割を検討する。特に首都あるいはそれに準ずると考えられる遺跡における神殿の位置づけに着目する。

宮殿と神殿、競争と協同、政治と宗教、という二分法を用いて説明すれば、アンデスでは常に後者が目立つ。古代アンデス社会の特徴を考える際には、政治的側面と宗教的側面を分けて，両者の関係を模式的に捉えることが有効である。

キーワード

アンデス、国家、都市、神殿

目次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　アンデス形成期の神殿社会
Ⅲ　国家形成と都市の成立
　１　モチェ社会の中心
　２　ティワナク社会の中心ティアワナコ
　３　ワリ帝国の首都ワリ
　４　シカン社会の中心バタン・グランデ
　５　チムー王国の首都チャンチャン
　６　インカ帝国の首都クスコ
　７　まとめ
Ⅳ　都市と神殿
Ⅴ　物質と儀礼
Ⅵ　競争と協同
Ⅶ　都市間・都市内の複雑性
Ⅷ　おわりに

Ⅰ　はじめに

南米大陸西部のアンデス地帯は初期文明が誕生し、そして初期国家が成立した場所として知られる（図１）。ゴードン・チャイルドが事例として取り上げた西アジア地帯は、文明、国家、都市の成立が互いに関連して進行したと見なされてきた（Childe 1950; Yoffee 2005）。しかしながら、アンデス地帯では文明の始まりは紀元前3000年頃であり、一方で、国家の成立は紀元後200年頃と想定される。この約3200年というタイムラグがアンデス文明を特徴づけている。アンデス文明の始まりの指標とされるのは、神殿と呼ばれる公共建造物である。神殿を中心とした社会が形成期（前3000–50年）の約3000年間続き、その後、早くとも後200年頃に、ようやく国家と呼ばれる社会が現れた、という説明が現在のアンデス考古学におけるス

＊ 南山大学

図１：本論文で言及する遺跡（筆者作成）

タンダードな説明である。チャイルドが扱った西アジアの事例から、アンデスの事例は離れている。例外的に見えるからこそ都市と国家の関係の見方を整理するのに好都合である。

アンデスにおいて、都市は基本的に国家社会に伴うと理解されてきたため、形成期の神殿は都市とは見なされなかったが、近年国家と都市を結びつける考えは再考されている（Jennings & Earle 2016）。多くの研究者がアンデスの初期国家と認定するのがモチェと呼ばれる社会であり、それは後200年頃から900年頃まで続き、複数のセンターが建設された（Chapdelaine 2011; Koon & Alex 2014; Quilter 2002）。それらのセンターが都市的とされる。後200年頃はまだ国家段階に達しておらず、モチェ後期に国家段階に達したと想定する研究者もいる（Shimada 1994）。しかし、モチェ社会のセンターであるワカス・デ・モチェ遺跡の利用は後200–250年頃まで遡り、すでにその頃には国家形成プロセスが始まっていたと判断することはできる（Bourget 2016: 11, 374）。

本論文では、はじめにアンデス形成期における神殿の特徴を概観し、その後成立した国家社会の都市的大規模遺跡（センター）における神殿の役割を検討する。特に首都あるいはそれに準ずると考えられる遺跡における神殿の位置づけに着目する。こうした作業を通じて、都市という概念自体を再検討したい。

II　アンデス形成期の神殿社会

コトシュ遺跡の発掘を指揮した泉靖一は「はじめに神殿ありき」と述べた（泉 1966）。その言葉通り、アンデス文明の幕開けを告げたのは神殿であった。社会の大規模化・複雑化のプロセス、と文明を定義するとすれば、アンデス文明の始まりの証拠は神殿という公共建造物に認められる。形成期のアンデスには数百もの神殿が建てられ、各神殿は複数回の更新を経て、大規模化した。つまり特定の形の神殿をずっと保存するのではなく、古い神殿を埋めてそれにかぶせるように、あるいは既存の建物に新しい部分を付け加えるように新しい神殿を造ったのである（加藤・関［編］1998）。その結果、更新活動が繰り返されるごとに神殿の規模は拡大した。現在放棄されて遺跡となっている神殿は、複数回の更新活動の結果に到達した最終段階の規模を示している。それは一時期に建設されたものではなく、長期間にわたる建設活動の結果である（渡部 2013, 2019）。神殿建設を始めた人々が当初予想しなかった意図せぬ結果がもたらされた（*cf.* ギデンズ 1989 [1979]; Joyce 2004）。アンデス形成期の神殿はあらかじめ決まった設計図を基に建設され、完成され、保存されたのではなかった。完成形があるのではなく、更新を続け、神殿の形や規模が変化し続けたのがアンデス形成期の神殿建築の特徴であった。そしてそのプロセスの中で、農耕牧畜などの生業活動が活発化し、土器製作技術や冶金技術が発達した。神殿が社会活動の心臓であったと言える（大貫他 2010）。

本論文では、形成期の後に登場した国家社会における大規模遺跡の特徴を考える。そのためのポイントとなる、形成期の神殿の特徴を16点にまとめ整理しておきたい。ここでは形成期早期（前3000–1800年）、前期（前1800–1200年）、中期（前1200–800年）、後期（前800–400年）、末期（前400–50年）という時期名称を使用する。

① 神殿活動に関わる人々は単独の神殿に属すると想定されている[1]（④を参照）。単独の集団が複数の神殿を建設し維持することはなく、各神殿は基本的に独立しており、神殿間に上下関係はないとされる。形成期後期のチャビン・デ・ワンタルについては、他の神殿よりも上位に位置づけられることもあり、その人口は最大で約3,000人と見積もられている（Burger 1992: 168）。チャビン・デ・ワンタルでは居住域の広まりが確認されているが、形成期の神殿に付属する集落が確認されることはまれである。居住域が明確でないことが、後の国家社会に伴う都市的遺跡との違いである（居住区については⑤を参照）。

② 後200年以降に現れる国家社会に伴う都市の中で、形成期の神殿から連続的に発展した例はない。形成期の全ての神殿は放棄され、同じ場所にその後都市が建設された例はない。また形成期後期に大規模神殿があった地域は、その後の国家社会においては周縁的な位置づけとなった（渡部 2016）。

1　1つの遺跡に神殿建築が1つある場合と、複数存在する場合がある（④を参照）。ここで述べているのは、1つの集団が、複数の遺跡の神殿に属することがないという意味である。1つの遺跡内の複数の建物を同時に、あるいは順次建設、維持した可能性はある。

③ 各神殿は独立してはいるが、複数の神殿を結びつけるネットワークが発達した。形成期の神殿については、神殿のプラン（U字形、線形、など）や出土遺物によって、あるいは神殿更新のあり方（水平型、垂直型）によって、神殿の系統関係の整理、分類が行われている（加藤 1993; 関 2021 [1997]）。形成期中期の場合、ペルー北海岸のクピスニケ文化、中央海岸のマンチャイ文化という分類がある（Burger & Salazar 2014）。

④ 単独の建物が位置する神殿と、１つの場に複数の建物が集中する神殿がある。形成期中期から後期にかけてのチャビン・デ・ワンタル、クントゥル・ワシ、などは単独の神殿の代表例である。一方で、形成期早期のカラル遺跡（Shady Solís 2014）、形成期前期から中期のカバーリョ・ムエルト遺跡（Nesbitt 2019; Pozorski 1982）などは、複数の基壇型建物が集中する場である。複数の集団がそれぞれの神殿を建設したか、あるいは神殿更新の１つのパターンとして順次、新たな建物を建設したという可能性がある。形成期早期から神殿建築を１つ抱える社会と、複数抱える社会が、分離していたことになる。形成期後期には１つの神殿を建設するケースが目立つようになった。

⑤ アンデス形成期には神殿の証拠が明確であるが、神殿を建設した人々、儀礼に参加した人々は神殿に恒常的に住んでいたわけではない。また集住化を示す集落の痕跡も希薄である。現在の伊勢神宮や明治神宮のように、神殿の建設、神殿における儀礼などのため、一時的に人々が集まったが、それ以外の時間は神殿の外側で分散して生活していたと考えられる。そして神殿の周囲で住居址が検出されたとしても、そこでの物質文化は神殿での物質文化の一部と同じである（Burger 1983; 関 2006）。つまり、住居址からの出土遺物は、神殿における出土遺物と大きく異なるわけではなく、聖と俗という二分法によって神殿とそれ以外の部分の関係を明確に捉えることはできない。むしろ住居も広い意味で神殿活動の中に内包されていると捉えた方がよい。

⑥ 神殿は常に更新され、完成形というものは基本的になかった。神殿の大きさは例えば神官など社会のリーダーの権力を示すのではなく、神殿が存続した時間、神殿建築に携わった人々の累積した労働力の量に比例している。そのため神殿を造り始めた人々が予想しなかった、意図しない結果がもたらされた（ギデンズ 1989 [1979]; Joyce 2004）。カスマ谷のセチン・バホ神殿のように2000年以上という長期間存続した神殿の例もある（Fuchs *et al.* 2008, 2010）。これまで発掘調査された神殿は短くとも数百年の存続期間がある。ただし、更新があまり繰り返されなかった神殿の場合は小規模のままであり、遺跡として認識されにくいという理由もある。また、石の神殿の場合は残存するので検出されるが、木製など腐食しやすい構造物は検出できない。また、更新をするとしても、場所を変えて行う場合は大規模化しないため、そのような神殿の場合、検出することは難しい。

⑦ 先スペイン期最後の15−16世紀のインカ帝国期のアンデスにおける信仰はワカ信仰が基本であった。ワカとは聖なる物体のことであり、山、岩、泉など自然の地形がそのように見立てられた（Salomon 1991）。そして各共同体には、祖先がそこから生まれ出たと考えられる特別なワカがあり、それらはパカリナと呼ばれた（アリアーガ 1984 [1621]）。アンデス形成期の信仰がこうしたワカ崇拝の原初的形態であるならば、神殿はワカを祀る場であり、祖先崇拝が基本であった（*cf.* Kaulicke 2014）。つまり抽象的な神という概念があったわけではなかった。そしてワカの場所は基本的に移動できないため、同じ場所での神殿の更新が基本となった。

⑧ 形成期早期から形成期後期までの神殿には防御壁などはなく、外部から神殿に入ることは制限されておらず、基本的にオープンな設計であった。ただし神殿中心部へのアクセスは狭く、コントロールされている場合が多い。武器や戦士を示した図像など組織的戦争の証拠は形成期後期までは皆無に近く、防御壁や戦士の図像は形成期末期になってようやく確認できる（Ghezzi 2006）。しかし防御壁は内部に生活する人々を敵から保護するという形ではなく、神殿を守るような形で現れた（渡部 2021）。つまり組織的戦争は資源を奪い合うような目的で始まったのではなく、神殿と関連付け

られていた。

⑨　神殿は強制力によって建設されたのではなく、人々の自発性によって建設、維持されたと考えられる。武力の証拠が不明瞭であるため、神殿の建設、更新にかかわる動員力は、権力者による指示によるものではなく、協同（cooperation）、集合行為（collective action）によると考えられる（渡部 2019）。神殿に関連する形で現れた形成期末期の戦争も、競争原理だけでなく、協同、集合行為の結果として組織化されたと想定できる（渡部 2021）。

⑩　アンデスでは先スペイン期の最終期のインカ帝国においても、貨幣経済や市場は発達しなかった（Murra 1980 [1956]）。必要物資は自給自足することが基本であり、物々交換によって利益を上げる商人もいなかった（Ramírez 2007）。ところが形成期の神殿という場に、遠隔地から運ばれたものが多く見つかっている。例えばペルー北部高地の神殿クントゥル・ワシでは、1,000km 以上も離れたボリビアのコチャバンバ地方のセロ・サポ原産のソーダライト石製の石製品が見つかっている（Kato 2014; 加藤 2010: 140）。またエクアドルの温暖な海でとれるウミギクガイや原産地が限られる黒曜岩も原産地から離れた神殿で見つかっている。そのためアンデス形成期には政治組織によって物資や人々が動く政治経済とは異なる、神殿を中心とした儀礼経済と呼べるような仕組みが機能していた（*cf.* McAnany & Wells 2008）。

⑪　建築、冶金技術、土器製作技術など物質文化の発達は、神殿における活動と結びついていた。アンデスの物質文化は儀礼に結びついており、政治的権力との繋がりは相対的に弱かった。インカ帝国の時代には、物質にはカマイという力が備わっており、それに寄り添うことが工芸品製作や建築活動の基本であると考えられた（カミンズ 2012; 渡部 2017）。

⑫　神殿の中に墓が組み込まれる例が、クントゥル・ワシ（Onuki 1995）やパコパンパ（Seki 2014）で確認されている。クントゥル・ワシ遺跡の場合は４基の墓が同時期に作られている。これらの墓自体が神殿への奉納と考えられる。そのため人物のための墓としての個別の建造物があるわけではなく、同じ神殿の中に複数の墓が組み込まれた。古墳やエジプトのピラミッドが人物のための墓であることとは対照的である。

⑬　神殿内の墓の中の遺体の少なくとも一部は、神殿更新というしかるべき時に選ばれて埋められたミイラであったと想定できる。そのため、古いミイラが利用、再利用された場合も考えられる。逆に、ある人物が死んだことが神殿更新の契機となった可能性も指摘されている（関 2010, 2015）。後のモチェ文化などでは、死者はいったんミイラにされ、しかるべき時に埋められた。それは「順延埋葬（delayed burial）」と呼ばれる（Millaire 2004）。

⑭　神殿内に組み込まれた墓は、副葬品や位置によって明らかに互いに区別されている。例えばクントゥル・ワシやパコパンパでは黄金製品を伴う墓とその他の墓とは区別されている。こうした墓は形成期後期から顕著であり、それを階層化、権力の萌芽の証拠と解釈する研究者もいる（Burger 1992; 関 2006）。たしかに副葬品によって区別されているが、そうした副葬品を階層に対応する要素としてではなく、神官の属性、あるいは神殿への捧げ物としての役割を示すと解釈することもできる[2]。

⑮　アンデスでは形成期前期から土器製作が始まり、特に酒壺が発達した。神殿では土器や動物骨が大量に出土し、饗宴の痕跡なども見つかっている（*cf.* Dietler 2001）。つまり神殿は大量に飲み食いする場所であった。後の国家社会においても特異に発達した土器の多くは酒壺である。

2　類例として、アフリカのイボ族では、捧げ物として立派な副葬品を伴う人物が捧げられたことが挙げられる（McIntosh 1999）。そのため、神官集団とその他の人々の関係を階層としてではなく、役割の違いとして解釈することも可能である。王殺しに類似した儀式が行われた可能性も考慮すべきである。実際、インカ帝国では、カパコチャという犠牲が捧げられた。山のワカなどに捧げられた少年少女の犠牲であり、頭部に打撲を受けた証拠などが見つかっている（ラインハルト 2007 [2005]）。

⑯　先スペイン期、特に形成期の図像表現は信仰に関わるものが多い。神官を表していると考えられる人物像はジャガーの牙、ヘビの頭、猛禽類の爪などの属性を備えている。ジャガーそのものは神ではなく媒介者と考えられる。王などの権力者の図像は形成期の後のモチェ文化などで同定されているが、時代が下るにつれて目立たなくなる。先スペイン期最終期のインカ帝国ではインカ王の図像表現はなく、あるのは植民地時代に描かれた図像である（Guaman Poma 1987 [ca. 1615]）。神の擬人化という習慣はスペイン人侵入時から顕著になったと考えられる。

形成期の祭祀センター（神殿遺跡）はその後の時代の大規模センターと区別される。形成期よりも後の時代では神殿と判定される建物が単独で存在することはなく、遺跡の中の建物の１つとして存在する。地方発展期以降の国家社会の場合には首都と認定される遺跡があり、その内部に神殿が位置し、大規模センターは単なる神殿ではなく、工房や倉庫を伴い複合的な性格を有する。形成期の祭祀センターは神殿のみからなり、そこで行われた活動は全て儀礼に関わることであり、倉庫などの物資の保管のための装置がないことから、都市とは見なされない。都市と区別して、都市的祭祀センター（civic-ceremonial center）という用語を用いる研究者もいる（Burger & Salazar 2012）。形成期の神殿の集大成と見なされるチャビン・デ・ワンタルについても、都市ではなく「原都市的センター（Proto-Urban Center）」（Burger 1992）と形容される。

形成期の遺跡が都市と見なされないのは、形成期の社会が国家ではない、という解釈と連動している。形成期の社会は日本語では神殿社会と説明されることもあるが、英語やスペイン語で形成期社会を形容する用語が定まっているわけではなく、国家（Pozorwski & Pozorwski 1987）、首長制社会（Stanish 2001）という言葉を用いる研究者もいる。

以下では形成期よりも後の時代の都市的とされる遺跡群をどのように分類できるかを試みる。

Ⅲ　国家形成と都市の成立

アンデスでは神殿を中心とした社会が約3000年も続いた。これまで確認されている神殿は百以上ある。そしてトルコのギョベクリ・テペの調査などから、西アジアでも国家成立のかなり前に祭祀センターが建設されていたことが明らかとなったが（三宅 2015）、それらと後の時代に成立した国家社会は連続的には繋がっておらず、断絶期間がある。アンデスでは、形成期の神殿を中心とした社会の発達が、その後の国家成立の基盤となった。アンデス文明の流れを俯瞰すると、社会の性格の変化は起こったが、大規模で複雑な社会が断絶したわけではなく、連続的に発達したと言える。

しかしながら、神殿を中心とした社会から国家が生まれたと簡単に説明できるわけではない。形成期後期の山地の代表的な神殿、チャビン・デ・ワンタル、クントゥル・ワシ、パコパンパ、カンパナユック・ルミ（Matsumoto 2019）などが位置する地域では、国家は成立しなかった。それらの神殿が位置する地域は、むしろ後の時代には国家の中心に対して周縁的な位置づけとなった場所である。海岸地帯において初期国家とされるモチェが成立したのは、形成期中期末に神殿が放棄されたモチェ川流域である。逆に形成期後期まで基壇型神殿の建設が継続した、ランバイェケ川流域（Alva 2012）、ネペーニャ川流域（Shibata 2019）では初期国家は成立せず、これらの地域は後にモチェ国家の支配下に組み込まれ、センターが建設された。特定の地域に焦点を当てると、形成期の神殿社会と国家形成の間に不連続性、断絶が認められる。

アンデスにおける国家は都市なき国家ではない。国家社会においては首都と認定される遺跡、都市とされる大規模な遺跡は確かにある。都市の定義を厳密にし、アンデスの大規模遺跡の特異性を強調し、都市ではないと主張することも可能である。例えばジョン・ロウは、クスコを対象として、どのような特徴を有しているのかを問い、西洋的都市との相違点を強調している（Rowe 1967）。また、クリストフ・マコフスキは西洋の都市を基準として、アンデスの大規模遺跡を「反都市的」と表現する（マコフスキ 2012）。アンデスの都市は聖なる場ワカを中心に構成された聖なる空間であり、文化と自然という二分法では捉えにくいためである。マコフスキは一方で、西洋の都市は人間を基準とした場であり、文化に属するという。西洋の都市についてはやや単純化しすぎであるが（*cf.* フュステル・ド・クーランジュ 1995 [1864]）、アンデスの大規模遺跡の特徴を模式的に明確に捉えている。

マコフスキの問題提起を念頭に置きながらもここでは、形成期の神殿遺跡と、それ以降の国家社会の大規模遺跡にどのような違いがあるかを検討したい。たし

かにアンデスの大規模遺跡は、住居と考えられる施設が少ないため、恒常的に生活する人々の数は少なく、一時的に人々が集まる場であったと考えられている。都市という概念を避けるのではなく、アンデスの事例の例外的な部分も組み込み、都市概念を鍛えたい。

形成期の神殿は、神殿とその周囲の居住空間との関係が希薄であったが、モチェ以降の国家社会の大センターでは、神殿が単独であるのではなく、王に関わる場に位置し、その周囲に居住域を伴っていた。このことが、形成期の神殿が都市と見なされず、国家社会に伴う大規模遺跡とは性格が異なると想定されている理由の１つである。

以下ではアンデスの大規模センターがどのような場なのかを考えるため、国家と認定される社会の中心、首都と想定される遺跡を取り上げる。都市の定義を検討するのではなく、まずアンデスの国家社会に伴う大規模センターの性格を、神殿に着目して整理する。

１　モチェ社会の中心

アンデス最初の国家、あるいは中央集権的社会モチェが成立したモチェ川流域は、形成期中期末の紀元前800年頃に、確認されている限り全ての神殿が放棄された場所である。形成期後期、末期には目立つ神殿建築は確認されていない。神殿建設が終わった約1000年後に新しい社会が誕生したのである。モチェについてはワカス・デ・モチェ遺跡を首都とした中央集権的社会であったと説明されていたが（Larco 1938, 1939）、南のモチェと北のモチェに分かれるという説が1990年代に提出された（Shimada 1994）。現在では各河川に独立した政体がありその集合体がモチェであると考える研究者もいる（Quilter & Castillo [eds.] 2010）。

しかしながら政体としてのモチェの成立を考える上では、一番古い証拠に着目する必要がある。仮にモチェ社会の最古の証拠が１つの場に特定されれば、単独の場が中心となった中央集権的な社会というモデルが、少なくともモチェの最古の段階には当てはまる。あるいは最古の遺跡が複数あり同時並行的に成立したのであれば、複数の場に同時に国家が成立したメカニズムを説明する必要がある。現在のところ、最古の遺跡はモチェ川流域のワカス・デ・モチェ遺跡であり（図２）、それに匹敵する古さを持つ遺跡は他の場所では確認されていない。モチェを南北に分けて考えるのであれば、南のモチェの最古の証拠がワカス・デ・モチェ遺跡であり、北のモチェの範囲内の最古の証拠はヘケテペケ川流域のドス・カベサス遺跡にある（Bourget 2016: 375）。ワカス・デ・モチェの始まりは後200–250年頃であるのに対し（Bourget 2016; Koon & Alex 2014; Trever 2022）、ドス・カベサス遺跡の始まりは後300年頃であり（Donnan 2014: 119）、やや遅れるようである。これらの年代は、モチェ様式土器の年代であり、国家の始まりの年代ではない。そのため単独のセンターで国家形成が進んでいったのか、あるいは複数のセンターができたからこそ国家形成が進んでいったのかは、今後、各遺跡での居住開始年代と、中央集権化が進んだ年代を区別して検討する必要がある。

南のモチェ、チムー文化の中心となったモチェ川流

図２：ワカス・デ・モチェ遺跡（Uceda 2010を改変）

域場所では、前述の通り、形成期中期末には神殿が放棄されている。北のモチェの最古の証拠はヘケテペケ川流域のドス・カベサスであるが、その後、より北のランバイェケ川流域にモチェ文化の遺跡が複数現れる。ランバイェケ川流域は形成期後期まで神殿建設にこだわっていた場所の1つである。コリュ=サルパン遺跡は海岸地帯では最後の形成期後期の大規模神殿である。コリュ遺跡は土器様式に基づき、コリュ前期（前1500–1000年）、コリュ中期（前1000–800年）、コリュ後期（前800–400年）の3時期に区別されている（Alva 2012: 212–216）。そのため遅くとも前400年頃には放棄されたと考えられている。南のモチェの中心部では前800年頃に神殿遺跡はほぼ全て放棄されたが、北のモチェの範囲では形成期後期にも神殿があったことから、最後の大規模神殿の放棄から国家の登場までの時間はより短かった。

モチェ文化の終わりの年代は後900年頃とされる（Koons & Alex 2014）。いくつかのセンターはそれよりも前に放棄されており、後700年頃から漸次的に崩壊プロセスが進んだと言える。モチェ社会の実態は、時期ごとに変化したと考えられるが、モチェ国家崩壊の後、北のモチェの地域ではシカン文化が、南のモチェの範囲ではチムー文化が連続的に発展したことを考慮すると、後700–900年の最終段階を理解するには北のモチェと南のモチェという枠組みが有効であろう。

南のモチェのワカス・デ・モチェ遺跡は、太陽のワカと月のワカを中心として、その間に建築物が集合する設計である（Chapdleine 2002, 2011; Uceda 2010）。工房や倉庫などの施設が集中している。そして2つのワカは複数回更新され、大規模化した。そのメカニズムは形成期の神殿更新と同様である。ブライアン・ビルマンは人口を最大で5,000人から12,500人と推定している（Billman 1996: 61, 302, 312–313, 315, 341）。面積を100ヘクタールとし、1ヘクタールあたり10から25の住居址があり、合計1,000から2,500基の住居があったと想定し、1基の住居に5人住んでいたとすると、5,000人から12,500人という計算である。しかし住居址と認定される建物が多くないため、ここでは5,000人程度と想定しておきたい。クロード・シャプドレーヌは6,000人以上と試算し、労働などのために一時的に10,000人以上が集まったと述べている（Chapdelaine 2009: 185）。多くの人々が一時的に集まることはあっても、恒常的に生活する設計にはなっていないのである。通路も特定の場へアクセスする設計であり、通路から複数の建物へ繋がるわけではない。

北のモチェの最古の遺跡であるドス・カベサスは、基壇型の構造物があり、複数回更新を経ていることが分かっている（Donnan 2007, 2014）。墓が多く見つかってはいるが、他に工房や倉庫などの施設がどれだけあるかなどは明らかになっていない。そもそも北のモチェでは基壇型建造物と墓が中心であり、それ以外の建造物は目立たないのかもしれない。

次に北のモチェの範囲内にあるシパン遺跡の事例を取り上げよう。シパンは基壇型の建物が多く集まる遺跡である。そしてそれぞれの建物は、何度も更新されている。シパン遺跡では1つの建物の中から、建物の更新に合わせて複数の時期の墓が10基以上見つかっている（Alva & Donnan 1993）。個人の墓専用の建物はない、という点が重要である。古代アンデスではモチェ以外の社会においても、そもそも個人用の墓として建設された大規模な建造物は確認されていない。エジプトのピラミッドや日本の古墳のように、独立して大きな墓を作る文化と異なり、墓はシパン遺跡の例のように既存の建物に付随し、それに組み込まれた形で複数の墓が存在するのが基本である。また住んでいる場所から離れた場所に墓が造られる場合とは異なり、住居の床下に墓が造られる場合もあるため、祖先と共に生きると表現される（*cf.* Dillehay [ed.] 1995; Shimada & Fitzsimmons [eds.] 2015）。

モチェ文化の前半期には基壇を中心としたセンターが中心であり、モチェ後期にはパンパ・グランデやガリンドなど、小規模建造物が集中する性格の異なるセンターが建設された。1つの建物が複数回更新されるという傾向は、多くのモチェ文化の遺跡で確認されているが、最終期の状況は異なる。北のモチェの範囲内のランバイェケ川流域に位置するモチェV期（後600–800年；Cervantes Quequezana 2020: 33）のパンパ・グランデには、更新を経ずに短期間に建設された大規模建物が集中している。更新の結果、大規模化したわけではない。短期間に多くの労働力を動員できる仕組みがようやく確立してきたのである。チェンバー・フィル（chamber fill）という、日干しレンガで先に区画を作り次にその中を土で充填し一気に体積を増やす建築技法が導入された（Shimada 1994）。そしてパンパ・グランデ遺跡は後800年頃に放棄された。

最終的にはモチェ文化の全ての遺跡が後900年頃までに全て放棄された。そのため、北のモチェと南のモチェに分かれていたとしても、また各河川で独立した

政体があったとしても、それらは互いに結びついており、1つの大きな政治システムを形成していたと考えられる。アンデス形成期にも、海岸では前900–800年頃、山地では前500–400年頃に多くの神殿が放棄された。神殿は互いに結びつき連動していたと考えられるが、モチェは形成期のそうした特徴を引き継いだと言える。コリン・レンフリューの同列政体モデルと類似する（Renfrew 1986）。また、古典期マヤなどが類似例として挙げられるであろう。

モチェ文化の大規模センターは、その始まりの状況は不明瞭であるが、国家の成立とともに大規模化したこと、そして国家の崩壊後も利用が続けられたのではなく、国家の崩壊とともに放棄された点が特徴である。複数の国家によって連続的に使用された場ではない。この点は東アジアの都城と共通する（藤本 2007）。

モチェ後期の北のモチェの中心は、シパン遺跡が位置するランバイェケ川流域であり、そこにはシカン文化の中心となるバタン・グランデが位置する。シカン文化の編年は前期（後800–900年）、中期（後900–1100年）、後期（後1100–1375年）（Shimada [ed.] 2014）の3時期に分かれており、モチェからシカンへの間にタイムラグはない。一方で、南のモチェの中心であるモチェ川流域には、その後チムー王国の首都チャンチャンが建設された。その始まりは、バタン・グランデの最盛期であるシカン中期と同じ頃と考えられる（Campana 2006: 148–149; Kolata 1990: 110）。ただしチムー様式土器の始まりは後800年頃まで遡る。

モチェ社会の崩壊と次の国家社会との間にタイムラグがどれほどあるかどうかは、その後の社会展開を理解する1つの指標となろう。つまり、北のモチェの範囲で時間的に連続して発展したシカン社会は、王の存在が不明瞭で、神殿を中心としたより儀礼的な特徴を示す。一方、南のモチェの最終段階と首都チャンチャンの始まりの間に数百年の時間的断絶があるチムー社会は中央集権的で、首都が明確で地方センターが設置され、より政治的な特徴を示す。主要な建造物が王と結びつけられ、基壇型の神殿の特徴が欠如している。

2　ティワナク社会の中心ティアワナコ

次に中央アンデス南部のティワナク社会の中心ティアワナコ（後600–1100年）を取り上げる（図3）。ここでは文化名としてはティワナク、遺跡名としてはティアワナコと区別して使用する（Isbell 2002）。

ペルー南海岸では前800年頃から神殿建設を伴うパラカス文化が発展した。パラカス文化から連続的に発展したナスカ文化（前100－後700年）は、同時代のモチェ文化と比較して、形成期の神殿社会からの連続性を強く示す社会である。南海岸の社会と同様に、高地のティティカカ湖周辺では北岸周辺のプカラ文化（前200－後200年）と同時期に、南岸周辺ではカラササヤ期にティアワナコ遺跡で居住が始まっており、そこからティワナク文化が連続的に発展した。

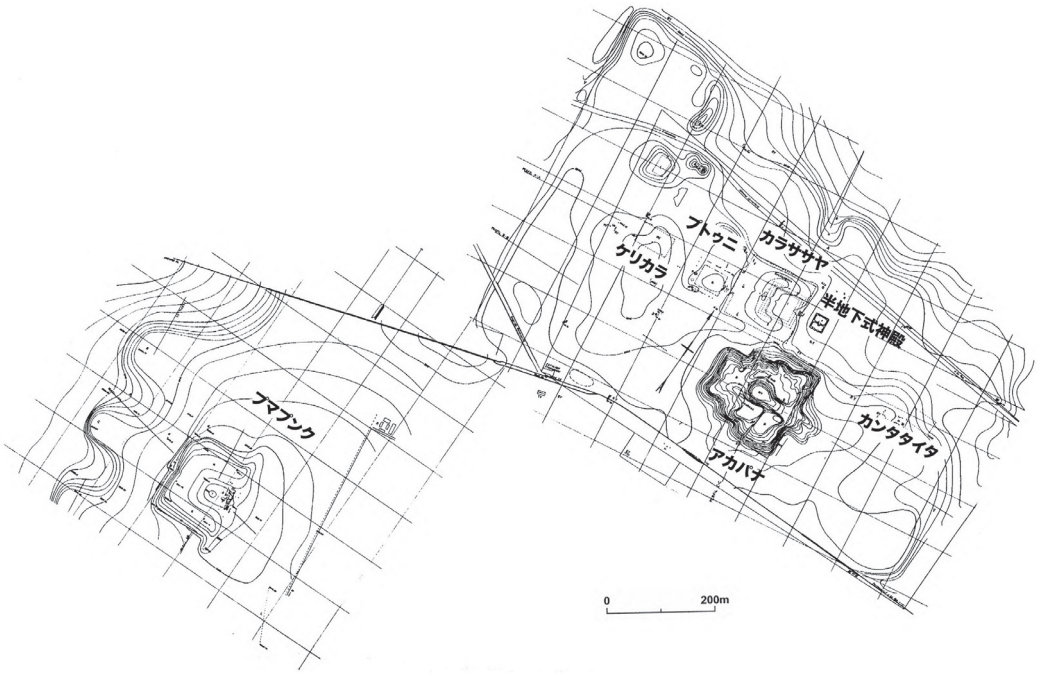


図3：ティアワナコ遺跡（Protzen & Nair 2002を改変）

ティアワナコ遺跡内の建造物は複数回の更新プロセスを通して大規模化したのではなく、短期間に建設されたようであり、大量の労働力を短期間に動員する社会的仕組みが存在していたことを示している（Manzanilla 1992）。主要な建造物は後600年頃までに建設され（Kolata 1993）、後800年頃には改修され拡張されている（Janusek 2008）。ティアワナコ内部には、７段構造のピラミッド形のアカパナ、基壇建築のプマプンク、カラササヤなど多くの建物がある。それらの間に建設の時期差があるかどうかは分からない。もし複数の建物が同時期に建設されたのだとすると、神殿更新のように、建物が１つずつ追加されたことによる長期間の建設活動の結果として遺跡の面積が広まったのではなくなる。さらにティアワナコ遺跡は形成期の神殿遺跡と同様にオープンな設計であり、防御壁はない。そのため戦争には適していない構造である。遺跡内のプトゥニが宮殿とされているが、あまり高さはないため目立たない（Kolata 1993）。

後述するワリ文化と比較すると、形成期から連続性がどれだけあるかが、その後の社会展開を方向付けたと言える。ティアワナコ遺跡は形成期の神殿との類似性を強く示す。例えば、基壇型の建造物のうちアカパナのピラミッドは、形成期の遺跡クントゥル・ワシと類似している（Manzanilla 1992）。基壇上部に半地下式の広場があり、基壇内部を水路が通り、それが入口と出口を持つ儀礼的な水路であるという点は共通する。一方で相違点もある。形成期の神殿は基本的にそれぞれ独立して存在しており、それらを結びつけるネットワークがあったが、遺跡間のヒエラルキーは想定されない。それに対し、ティワナクには中央と地方という関係があり、地方に下位の遺跡があることが違いの１つである。ティワナク社会の地方の遺跡には、ティティカカ湖周辺に位置するルクルマタ遺跡（Bermann 1994）や、ペルー南海岸のモケグア谷に位置するオモ遺跡（Goldstein 1993）などがあり、それらはいずれも基壇型の建物を中心とした設計である。アカパナと同様に基壇上に半地下式の広場が位置しており、形成期の神殿建築と類似する。ティアワナコ遺跡と地方の遺跡との間の規模の違いは明確であり、一極集中型の社会とも言える。住居址も含めれば３段階の遺跡の規模の階層性があることは明瞭であるが、４段階以上の階層性は不明瞭である。

ティワナク社会に王と考えられる人物がいたと想定されるが、その墓などは見つかっていない。コチャバンバ地方で黄金製品を伴う墓は見つかっているので、副葬品によって被葬者を差異化する習慣はあったことは分かる（Janusek 2008）。

ティアワナコ遺跡の人口についてジョン・ジャヌセクは最大で10,000–30,000人と推定している（Janusek 2009: 169）。またアラン・コラタは、遺跡周辺の畑の面積から、最大で中核部で115,000人ほど、周辺部で250,000人、あわせて365,000人の人口を支える食料を栽培することができたと試算している（Kolata 1993: 205）。最少の見積もりでも10,000人となる。

３　ワリ帝国の首都ワリ

ティワナクと同時期の国ワリとの間では、図像表現が共通する。しかし、遺跡の構造、性格などは異なる。

首都ワリ（図４）をはじめとして、ワリ文化の多くの遺跡では幅1m以上もある厚い壁が確認されている。城壁のように見えるが、分厚い壁の機能を単に軍事的側面から説明できるかどうかは分からない。

ワリ（後600–1000年）が防御に適した構造であることは確かである。ワリの図像には人物が頻繁に描かれ、その中に武器を持った戦士が含まれる。斧、投石器、投槍器と槍、弓矢、盾などが識別できる（オチャトマ・パラビシノ & カブレラ・ロメロ 2024）。

ワリ遺跡ではいわゆる基壇型の建物は明確ではなく、広場や部屋状構造物などの壁に囲まれた空間を重視した設計となっている。他のワリ関連遺跡でも同様である。そのため神殿建築があったとしても、基壇型ではなかったと想定できる。後のインカ帝国の首都クスコの中心に位置する太陽の神殿は、中央の空間を建物が囲う設計であったが、それと類似した形態であったのかもしれない。

これまで確認された建造物の中で神殿の候補の１つは、Ｄ字形建造物である（Ochatoma Paravicino & Cabrera Romero 2023）。神殿が目立つ建造物だと想定すると、他に候補となる建造物は今のところない。Ｄ字形建造物は、上から見ると一部がまっすぐになっている円形構造物である。それらは、首都ワリのほか、いくつかの地方行政センターで確認されている（Cook 2001; Meddens & Cook 2001）。首都ワリ遺跡、その近くのコンチョパタ遺跡の他、クスコ県のエスピリトゥ・パンパ、カリェホン・デ・ワイラス盆地のホンコ・パンパ、モケグア谷のセロ・バウルなど地方の遺跡で確認されている。重要な点は、ワリ遺跡においても、地方の遺跡においても、１つの遺跡内にＤ字形

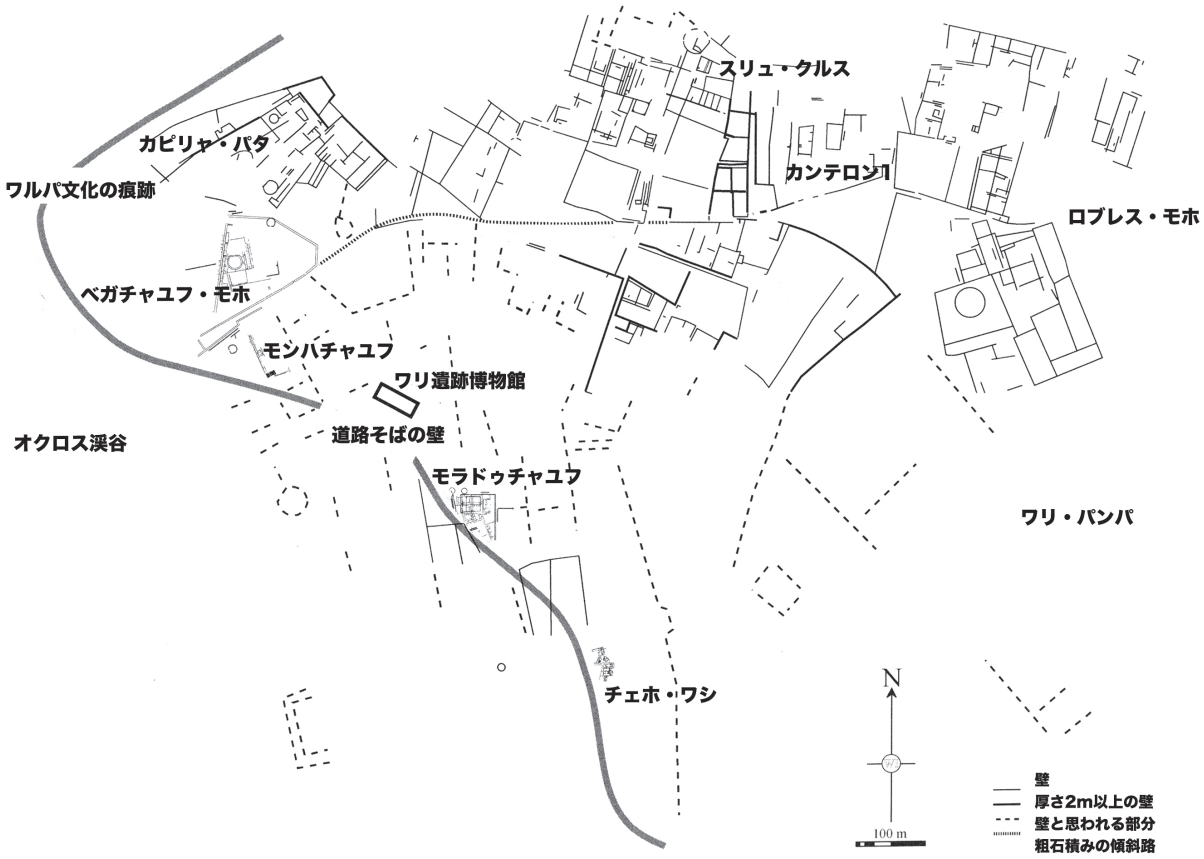


図４：ワリ遺跡（Isbell 2009を改変）

建造物が複数確認されているという事実である。

同一遺跡内に神殿の候補となる建造物が複数あることをどのように理解すればよいのであろうか。ワリ遺跡内ではベガチャユフ・モホ地区の壁龕付き建造物（Bragayrac 1991）、モンハチャユフ地区の大型空間（Cabrera Romero & Ochatoma Paravicino 2019）など目立つ建築物にD字形建造物は付随しており、D字形建造物はより大きな建築群の一部となっている。またD字形建造物が宮殿であるという解釈もある（Isbell 2004）。後述するインカ王に個別の宮殿があったインカのモデルを援用し、D字形建造物は、複数あることから宮殿であると解釈すると、ワリ遺跡内に神殿の候補がなくなってしまう。ここではD字形建造物が神殿と宮殿を兼ねていたために複数建設された可能性を検討したい[3]。

D字形建物の内壁の壁龕がミイラを置く場所ではないかという解釈もあり、その場合、墓も兼ねることになる。ワリ遺跡では墓と考えられる遺構が、ベガチャユフ・モホ、モンハチャユフ・モホ、チェホ・ワシ等で確認されている。いずれも集合墓であり、地下に埋もれている。墓専用の大規模な建物が存在するわけではない。地方行政センターにおいては、カスティーリョ・デ・ワルメイなどでも同様の、建物の中に組み込まれた小部屋状の墓が確認されている。またワリ期の地方で現れるチュルパと呼ばれる塔状墳墓は小規模でかつ集合墓である（Lau 2010; Watanabe 2014）。

イズベルはワリ遺跡の人口について、1991年の論文では、多く見積もって35,000–70,000人、少なく見積もって10,000–20,000人としている（Isbell *et al.* 1991: 51; Conlee 2016: 136）。その後、2001年の論文では、最大で40,000人としている（Isbell 2001: 106–107）。2009年にはケブラダ・デ・オクロス期（後500–650年）に10,000–20,000人、モラドゥチャユフ期（後650–800年）に25,000–40,000人、と想定している（Isbell 2009）。最大時の人口は少なく見積もっても2万人と想定される。

3　ワリ社会において、神殿と宮殿が同一の建物だとすると、王が神官を兼ねていたのかどうかを検討することが必要であろう。別々であった場合、4つ突起のある帽子をかぶった人物、および両手に投槍器と槍を持った人物が頻繁に描かれているが、前者が政治的指導者、後者が宗教指導者といった役割の違いがあるのかもしれない。

地方支配の拠点と考えられる施設である行政センターはペルーの広範囲に建設された。地方における建築物を伴うワリ関連遺跡は、大きく2つのタイプに分けられる。1つは「直交する細胞状建築」、もう1つは「不規則に累積する建築集合」である（Watanabe 2019）。第1タイプの「直交する細胞状建築」は、先に外壁を立て、その後内部を分割して部屋状構造を造るという建設順序に従っている（Isbell 1991）。ピキリャクタ、ビラコチャパンパなどが代表例である。外壁が厚いため防御的であり、基壇を中心としたティワナクの地方遺跡とは異なる。第2タイプの「不規則に累積する建築集合」は明確な中心や境界はなく、それぞれ独立した建物が複数集合している遺跡である。セロ・バウル、ホンコ・パンパ、コンチョパタなどが例に挙げられる。D字形建造物が確認されている地方の遺跡は、第2タイプの地方行政センターである。地方の遺跡のD字形建造物は、特定の支配者、行政官などに対応し、王や地方首長が即位のたびに独自の宮殿兼神殿を建てたのかもしれない。その他、地方では建造物を伴わないワリ関連遺跡も確認されている。例えば、墓、あるいは奉納という形でワリ文化の遺物が確認されている（Watanabe 2019）。

4　シカン社会の中心バタン・グランデ

シカン社会は、北のモチェに対応する範囲内に発展した。最盛期には北はピウラ川流域から南はチカマ川流域までの南北約350kmの範囲を支配下に治めた。前期シカンは後800–900年であり、ワリ帝国と同時代である。シカン文化の最盛期はシカン中期（後900–1100年）であり、その中心はバタン・グランデ遺跡であった（図5）。東西1.6km、南北1kmの大きさで、多くの基壇型建物があり、ロロ神殿など、それぞれに「神殿」という名前がついている（島田他［編］2009; Shimada [ed.] 2014）。バタン・グランデの中心部はベンタナス神殿とコルテ神殿の間の空間の大広場である。そしてロロ神殿の麓では大量の副葬品を伴う墓が複数見つかっている。未発見の墓もおそらくまだあるだろう。逆に宮殿と特定できる建造物がない。

島田泉は、バタン・グランデに6つの大きな基壇建築があり、それぞれが個別のエリート貴族に対応すると想定している。つまり、シカン社会内部が6つの集団に分かれ、時代ごとに互いに競争したり手を組んだりして、権力を取得、保持していたという（島田他［編］2009: 53–55; Shimada [ed.] 2014: 70–71）。6つの基壇建築とは、コルテ神殿、ベンタナス神殿、ロロ神殿、ラ・

図5：バタン・グランデ遺跡（増田他 1994を改変）

ソルティリョ神殿はロディリョナ神殿の1kmほど北に位置する。

メルセッド神殿、レルカンレチ（ロディリョナ）神殿、ソルティリョ神殿である（島田他［編］2009: 252）。それ以外にモスコン神殿、ボティハ神殿などより小規模で補助的な基壇が6つある。大きな6つの神殿のうち、レルカンレチ神殿、ソンティリョ神殿は北西方向に位置し、他の4つの神殿のある中核部からやや離れている。2つの神殿は後1000–1100年頃に建設され、それら以外の4つの神殿が後900–1050年頃に建設された。そのため、6つの集団に分かれていたのは最終段階であり、それよりも前の時期には集団の数はより少なかったのかもしれない。

バタン・グランデはシカン中期の終わりに放棄された。その後、シカン後期（後1100–1375年）にはより下流に位置するトゥクメ（別名エル・プルガトリオ）が中心となり（Heyerdahl *et al.* 1995; Narváez & Delgado [eds.] 2011）、さらにヘケテペケ川河口付近にパカトナムーという行政センターが建設された（Donnan & Cock [eds.] 1986）。シカン後期の遺跡は、いずれも広い広場状の空間を壁が囲うプランとなっている。そのためシカン後期に、別の形態の都市構造が生まれたと言える。トゥクメは1つの丘を中心としており、中心性が明確である。しかしどの建造物が神殿であったのかは不明瞭である。全体が神殿の機能を担っていたのかもしれない。

バタン・グランデの調査者である島田は人口推定を避けているようで、いかなる論文においても言及していない。博士論文執筆のためバタン・グランデの綿密な踏査を行ったガブリエラ・セルバンテスは、神殿を中心とする中核部（Sicán core）の周辺の遺物が分布する約5,000ヘクタールの範囲を「大シカン（Greater Sicán）」と呼び、土器の分布範囲から人口数を計算し、シカン前期で10,172人、中期で約11,861人、後期で4,197人と試算している（Cervantes Quequezana 2020: 139, 2024: 259–261）。次に述べるチムー王国の首都チャンチャン遺跡の推定人口が2万人であるから、そのおよそ半分である。

また、島田は「神権政治国家」という用語を用いてシカンを説明している（島田他［編］2009: 53）。1人の人物、1つの集団が政治的権力と宗教的権威を備えていたと想定されている。後のインカ帝国では、戦士であるインカ王と神官は別であった。それに対応するように首都クスコでは、神殿と、各インカ王の宮殿は別の建物であった。

5　チムー王国の首都チャンチャン

チムー王国の首都チャンチャン（後900–1470年）は20平方キロメートルを超える広さである（図6）。ワリ遺跡と同様に平面的な設計であり、高い基壇型の建物はない（McEwan 1990）。主要建造物は10の建築単位（シウダデーラ）である（Moseley & Cordy-Collins [eds.] 1990）。南から、チャイワク、リベロ、チュディ、ウーレ、テーヨ、ラベリント、バンデリエル、ベラルデ、スクワイア、グラン・チムー、と名前がつけられている。シウダデーラは同時に建設されたのではなく、1つずつあるいは2つずつ建設されていった（Cavallaro 1991; Kolata 1982; Sakai 1998）。連続的に建物が加わったという点で、神殿更新と類似している。そして、インカ帝国をモデルとして、シウダデーラは各王に対応し、そして王は死後もミイラとなり保管されたと解釈されている。各シウダデーラの中央には低い基壇型の建物があり、その全てが荒らされているが、その内部には王の墓があったと想定されている（Conrad 1982）。チャンチャンを王都と形容することもできる。チャンチャンの中心部は都市といっても、各王の建物が併存した空間なのである。

中心部は明確ではなく、クスコ内の太陽の神殿コリカンチャのように、チャンチャンの中心部に単独の神殿があるわけではなく、10以上の小型の神殿が分散してある（Campana Delgado 2006: 176–197; 坂井 2003: 250）。シウダデーラ付近には、ワカ・エル・イゴ、ワカ・トレド、ワカ・エル・オルビド、ワカ・ラス・コンチャス、ワカ・オビスポ、の5つの神殿がある。北に離れたところでは、ワカ・タカイナモ、ワカ・エル・ドラゴン、などの神殿がある（Jackson 2004）。クスコでは中心が明確であるが、チャンチャンでは中心の建造物を特定することはできない。複数ある神殿が中心となっているわけではない。チャンチャン遺跡内に神殿建築が分散しており、神殿とシウダデーラは併存している。仮に各シウダデーラに対応する個別の神殿があるとすると、王に対応する神殿があることになる。

チャンチャンにはシウダデーラの間と、シウダデーラの周囲に一般の人々が暮らしていた区域がある。それらは「小部屋群の不規則な集合（small irregularly agglutinated rooms, SIAR）」と呼ばれる。ここに生活する人々の数は20,000人と推定されている（Topic 1982: 146）。

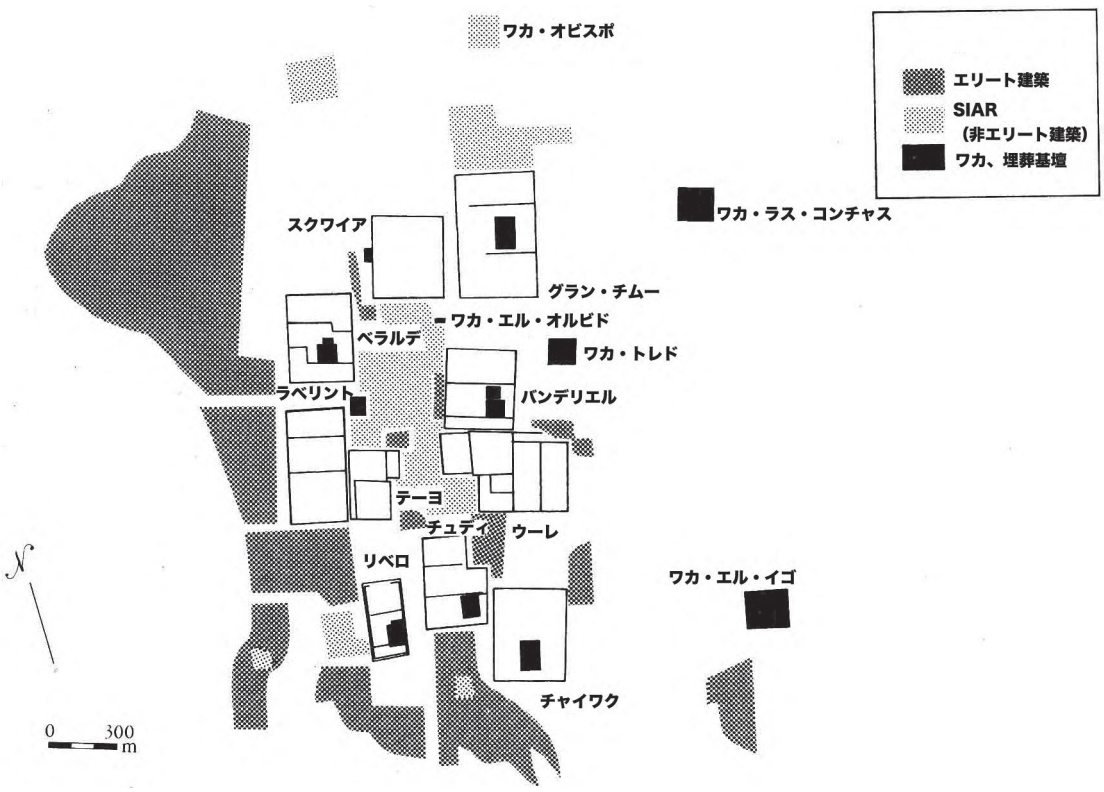


図６：チャンチャン遺跡（Shimada 2000 [1992] を改変）

６　インカ帝国の首都クスコ

インカ帝国はケチュア語でタワンティンスユと呼ばれた（渡部 2024）。それは「４つの部分（スユ）が一緒になった」という意味である。その名の通り、インカ帝国はチンチャイスユ、アンティスユ、コリャスユ、クンティスユの４つに分かれていた（図７）。正確には人間集団の分類であるが、人間集団が帰属するワカがあり、そのワカは空間に固定されているため、空間的分類にも対応する。チンチャイスユとコリャスユが大きく、インカ帝国の拡大はこの２つのスユの拡大に大まかに対応した。アンティスユは比較的狭く、クンティスユは西端が太平洋であるのでそれ以上広がりようがない。

後15世紀から16世紀に台頭したインカ帝国の首都はクスコである（図８）。クスコ内部も４つのスユに分かれていた。イエズス会士ベルナベ・コボが記したクロニカには、首都クスコの分類体系の基本であるセケについての情報が含まれている（Cobo 1964 [1653]）。クスコの中心である太陽の神殿から、セケと呼ばれる想像上の線が放射状に41本延び、ワカを結んでいた。各セケ、328のワカはそれぞれ４つのスユのいずれかに属していた。

首都クスコはワカを基準として分類されていることから、それ全体が巨大な祭祀空間であると見なすことができる。そのため、西洋的な都市という概念では捉えきれないという指摘もある（Rowe 1967）。そしてワカの立地に従って建物も配置されたのだが、注目すべきは建物自体もワカとして認識されていたということである。「家（casa）」、「宮殿（palacio）」という単語が用いられ、そしてそれぞれの建物がどの人物に属するかが記録されている（Cobo 1964 [1653]）。

インカ王と神官は別々の人物であり、それに対応するように神殿と宮殿の機能は分かれていた。ただし神殿は１つで、宮殿は複数あった（図９）。首都クスコの中心に神殿があり、その周辺に複数の宮殿が分散していた。なぜだろうか。

ヨーロッパの宮殿や日本の城は、歴代の王などの支配者が長期間にわたって受け継いでいくものである。ところがアンデスにはそうした巨大な宮殿が見当たらない。植民地時代の記録文書を読み解くとその理由が分かる。新しいインカ王は前の王の建てた建物、畑などの財産、そして前王に直接使える人々を相続できなかったのである（シエサ・デ・レオン 2006 [1553]; Conrad & Demarest 1984）。分割相続と呼ばれるこの仕組みは、インカ帝国拡大の背景として説明されることもある。王は死んだ後もミイラとなって存続し、生きているかのように傅かれた。アイリュと呼ばれる親族集団が王のミイラとその財産を保管した。1533年

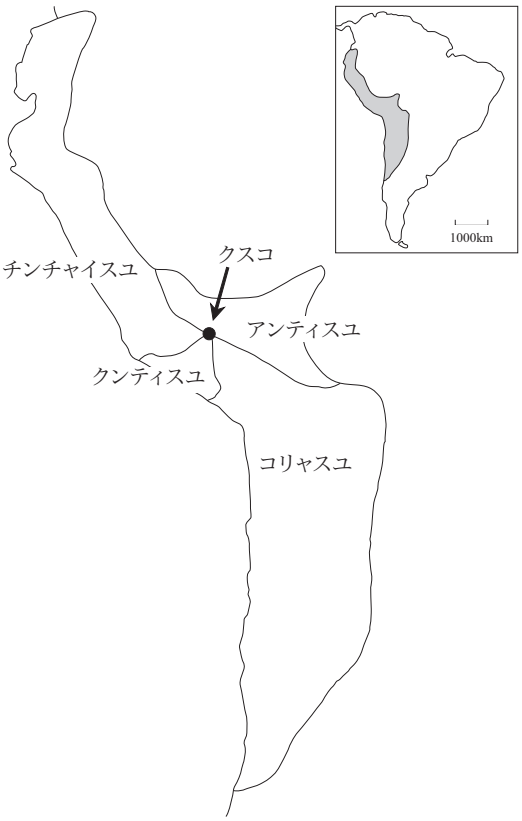


図７：インカ帝国の４つのスユ（渡部 2010）

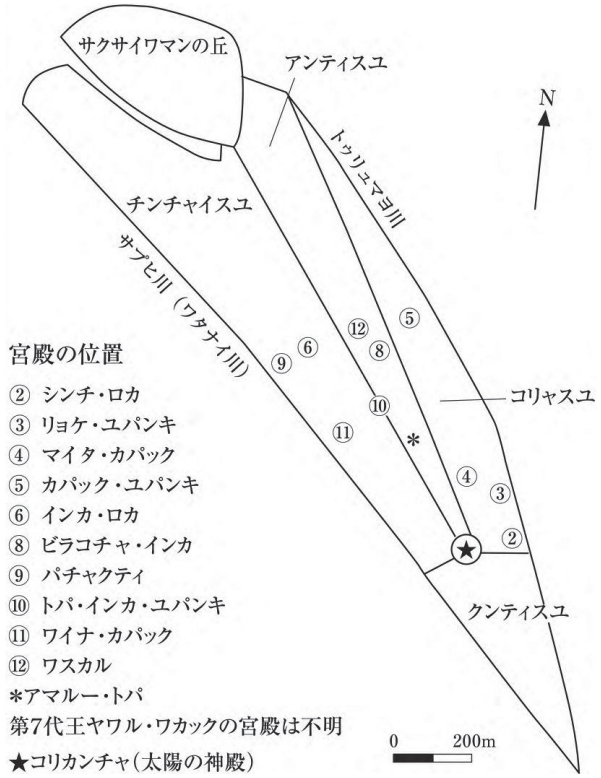
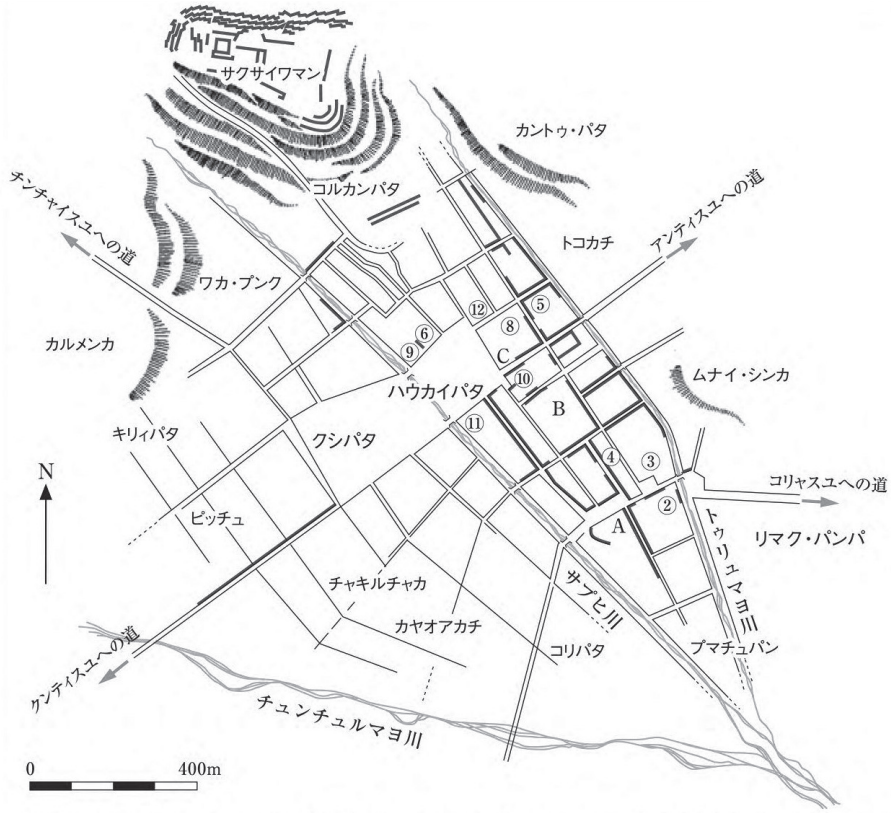


図８：クスコ内の４つのスユ（渡部 2024）



丸囲み数字は単一王朝モデルにおける歴代インカ王の宮殿の位置。②シンチ・ロカ　③リョケ・ユパンキ　④マイタ・カパック　⑤カパック・ユパンキ　⑥インカ・ロカ　⑧ビラコチャ・インカ　⑨パチャクティ　⑩トパ・インカ・ユパンキ　⑪ワイナ・カパック　⑫ワスカル
A はコリカンチャ（太陽の神殿）、B はアマルー・トパの宮殿、C はクユスマンコ

図９：クスコ（渡部 2024）

にスペイン人がクスコに入城したが、その頃インカ王のアイリュは10以上あり植民地時代においても特権を保持した（渡部 2024）。

前の王の宮殿はどうなるかというと、死後もその王のものとして保管された。そのため、新しいインカ王は新たに自分の臣下を確保し、宮殿を建設し、畑を開墾する必要があった。その結果、インカ王の宮殿とされる建物がクスコ内に複数あった（渡部 2017）。インカ王の宮殿もクスコ内の4つのスユのいずれかに属しているため、ワカを基準とした空間構造の中にインカ王自身も配置されている。クスコは構造が支配する空間であったが、そこには過去のインカ王の情報などが組み込まれていた。

クスコの中心部には神殿コリカンチャが位置する。コリカンチャの中心部には何らかの物体があるのではなく、空間である。神殿の周りにインカ王の宮殿が位置しているが、それは代々受け継がれる建物ではなく、各インカ王が建設したものである。その意味で、宮殿は代替わりごとに更新されていったが、形成期の神殿更新とは異なり、各建造物の規模が増大するのではなく、数が増加した。しかし更新され増加するのは宮殿であり、神殿が増加することはなく、太陽の神殿が連続的に利用された。

クスコの人口は76,000人と試算されている（Agurto Calvo 1980: 134–135; Davies 1995: 107）。クスコの住民は様々な人々で構成されていた。インカ族が複数のアイリュに分かれていた。またインカ帝国は、インカ族が非インカの多くの民族集団を支配した国であり、首都クスコには各地から集められた民族集団がおり、彼らは頭飾りや衣服によって互いに識別されていた。そして、各地の民族集団のワカがクスコに運ばれていた（Cobo 1964 [1653]: 108; Polo 1916 [1559]: 42, 2012 [1559]: 362）。しかし地区ごとに別々の機能が同定されているわけではない。あくまでワカを基準とした空間分類が中心であり、空間ごとの機能分化が認められるわけではない。ワカによっては個別のインカ王との関係が同定されている。2本の川に挟まれたクスコの中核部分は巨大な儀礼空間であり、そこに建物が集中するメカニズムは、ワカを中心とした仕組みから説明しなければならない。

ワリ帝国とインカ帝国の間には、例えば道沿いに設置された行政センターの分布パターンなどの共通点がある。一方で、明確な神殿建築があるという点ではクスコはティアワナコと近い。高地における先行する2つの国であるワリとティワナクの両方の特徴を継承している国であると説明できるであろう。

チムーとの比較では、チャンチャンの中に10のシウダデーラがあるのと同様に、クスコには歴代王の宮殿がそれぞれ分布する。一方でチャンチャンの中心は明確ではないが、クスコの中心が太陽の神殿であることは明瞭である。クスコ内の宮殿の分布や、チャンチャンのシウダデーラの分布は、バタン・グランデの神殿建築群の分布とも類似する。

7　まとめ

古代アンデスにおける大規模建築は、まず神殿から解釈する必要がある。形成期の神殿が中心となり、その後の国家社会の基盤が形成された。古代アンデスにおける大規模遺跡のいくつかは神殿都市、そうした都市を中心とした社会は神殿国家と呼べるような性格を有している。ここではインカ帝国よりも前の5つの国家を、神殿に着目して実験的に類型化してみたい。

初期の都市的大規模遺跡の始まりには大きく2つの流れがある。

中央アンデス北部のモチェ川流域における形成期の神殿の放棄とワカス・デ・モチェ遺跡の始まりとの間には1000年ほどの時間的断絶が認められる。しかし、基壇型の建造物を複数回更新するという特徴は形成期の神殿更新と同じである。

モチェとは別の流れ、つまり形成期からの連続性の上に成立した社会としてティワナクが位置づけられる。形成期の神殿社会の終わりとティワナクの始まりとの間には時間的断絶がない。ティアワナコ遺跡、ルクルマタ遺跡、オモ遺跡などのティワナク文化の基壇型の建築物は、高さ、ボリュームを重視している。ティアワナコ遺跡には基壇型の建造物が複数集中しており、それぞれ神殿的な特徴を備えている。

ワリ遺跡内には単独の大きな神殿の存在が確認されていない。D字形建造物が神殿機能を有する複合的な建物であり、1つの遺跡内に神殿機能を担う複数の建物が分散していた。そのため分散型の神殿と形容できよう。ワリ遺跡と同様にワリ帝国の地方行政センターは水平方向に広がり、基壇形の建物は目立たない。

シカン社会の中心のバタン・グランデでは中核部に大きな基壇型の神殿が6つあり、それぞれが別集団に属すると想定されている。神殿ごとに別集団を想定するという解釈は形成期研究においても同様である。一方で、ティワナク研究では建物毎に別の集団の存在は

想定されていない。それは各建物の配置が全体の設計の中で決まっており、独立した建物と見なされていないからである。一方、バタン・グランデでは形状が類似した建物が複数存在する。

チムー王国の首都チャンチャンでは1つの大きな神殿を特定することはできない。小型の神殿が複数ある。シウダデーラに対応する神殿があるとすると、王ごとに個別に存在することになる。分散型の神殿と見なすことができる。

高地においては、ティアワナコは形成期の神殿からの連続性を色濃く示す。一方ワリには基壇型の建築はなく、少なくとも表面上は形成期の神殿からの連続性は目立たない。ティワナクとワリとの間には首都の設計に違いがあるが、こうした分岐は後の海岸地帯のチムーとシカンとの間にも認められる。先インカ期の国家社会の中心となる大規模遺跡を次のように大きく2つに分類することを提案したい。

第1タイプ：ワカス・デ・モチェ、ティアワナコ、バタン・グランデ。1遺跡の中核部に複数の基壇型の神殿建築が集中する。宮殿は明確ではない。バタン・グランデの場合は6つの主要基壇のうち、ソルティリョ神殿を除く5つが集まる部分が中核部である。ワカ・コロラダという大きな基壇建築もある（Cervantes Quequezana 2020: 97）。

第2タイプ：ワリ、チャンチャン。中心部がどこかが不明瞭であり、大規模な基壇型の神殿はない。ワリ遺跡のD字形建造物、チャンチャン遺跡の神殿は1つの遺跡内に複数存在する。

いずれも1つの遺跡内に神殿と見なされる建造物が複数ある。第1タイプは中核部に神殿建築が集中するため密度が高い。第2タイプは建築単位ごとに分かれているので密度が低く、そもそもどこが遺跡の中心なのかが分かりにくい。

先スペイン期最後のインカ帝国の首都クスコにおける太陽の神殿は単一と捉えることができ、複数の神殿がクスコに併存するわけではない。神殿は中心性を持った単一の構造物である。一方で、先インカ期の国家社会の場合、1つの遺跡の中に複数の神殿建築が集合していると見なすことができる。

Ⅳ　都市と神殿

古代アンデス諸国の大遺跡は、都市とどのように整合するのか、あるいは不整合な点があるのだろうか。個別の事例が都市かどうか、都市的な部分は何か、という議論の進め方ではなく、我々が都市と呼ぶような大規模なセトルメントが形成されるプロセス、仕組みの共通性を整理することが建設的である。

これまで、都市形成と国家形成はパラレル、連続的なものと捉えられることが多かった。ノーマン・ヨフィーはアジアの事例を捉える際に、文明、国家、都市、の3つを同時並行的に進んだ現象として説明している（Yoffee 2005）。しかし文明と呼ばれる社会の大規模化、複雑化という現象が国家よりも先に進行したことはアンデスを含む多くの地域で確認されている。また都市と認定される遺跡のいくつかが国家形成よりも前に始まり、国家の展開と連動して大規模化したことも確認されている。またアンデスでは国家によって設置された行政センターなどの都市的遺跡もあることが分かっている。

国家は、大きく分けて一次国家と二次国家（Parkinson & Galaty 2007; Price 1978）に分類することができる。いわゆる旧世界の四大文明とアメリカ大陸のメソアメリカとアンデスが一次国家の形成された場所として捉えられる。この6つの地域の一次国家に関しては、国家形成と都市は同時並行的、あるいは時間差はあるが伝統的に連続的とされてきたが、近年の研究からはそうではない事例が多数報告されている。かつて都市なき文明と呼ばれたエジプトでも（藤本 2007）、ピラミッドタウンが発見され、ピラミッド建設以前に都市化が進んでいたことが判明している（河江 2015）。インダスについては、国家なき都市、あるいは国家の多様性の一部として捉えられている（Green 2021）。

各地の国家が形成された後の都市の違いは各国家の癖、性格を示しているが、やはり共通点もある。1つの場に多くの多様な建造物が集まること、そして様々な職業や民族の人々が多く集まることが最大公約数的な特徴である。少なくとも、小規模な場、あるいは人間構成が単純な場（例えば農民のみが集まる場など）を都市と形容することはない。アンデスでも例えば住居址と考えられる小規模建造物が集中したサンタ・デリア（後1200–1400年のカハマルカ晩期の遺跡）は、20ヘクタールはあるが、それを都市とは説明しない（Watanabe 2015）。またアンデスの都市的大規模センターでは恒常的に生活する人が面積に比して相対的に多くない。境界を持つ土地に人間が縛り付けられていたヨーロッパや西アジアなど他の地域の事例と異なる点である。

先スペイン期アンデスにおいて、大きなモニュメントである形成期の神殿と、その後の大規模セトルメントの違いは、神殿以外の要素がどれだけあるかであり、神殿の重要性、神殿中心という基本的な特徴は同じである。少なくともワカス・デ・モチェ遺跡、ティアワナコ遺跡、バタン・グランデ遺跡、クスコでは、神殿建築の存在は明確であり、開放的なプランで防御的な特徴は目立たない。神殿の特徴があまり明確ではないのはワリ遺跡とチャンチャン遺跡であり、基壇型建造物が目立たず、壁で囲われた平面的な構造物、枠を重視した設計であり、防御的な特徴を有する。

インカ帝国の支配下には80以上の民族集団がおり、それが行政単位となっていた。各民族集団はインカ帝国の支配下で再編成された結果であり、インカ期より前に存在していた形でそのまま編入されたのではない（渡部 2010）。インカ帝国では地方に行政センターが設置された。それは、地方統治のための拠点であり、いくつかのセンターは「もう1つのクスコ」と呼ばれた（渡部 2014, 2024）。

インカ帝国を征服したスペイン人は、これらの行政センターと西洋の都市との類似性を見いだし、その施設を再利用して町作りを行おうとしたが、ことごとく失敗した（Murra 2002）。行政センターの設計は、人が恒常的に住むのに適していなかったのである。生活用水の供給などは考えられておらず、数多くの建物があるが、それらは、住居ではなく、作業場や倉庫などの機能を備えたものであった。

恒常的に多くの人々が生活する場と、一時的に人間が集まる場は性格が異なる。国家社会に伴う大規模なセトルメントの1つである行政センターは、そこで儀礼が行われたと想定できるため、神殿と共通する機能を一部引き継いでいるということもできる。それに作業場、倉庫の機能が付け加わった場である。王や首長が儀礼を行う場でもあるから、政治的なパフォーマンスの場でもある。

インカ帝国の行政センターなどの大規模なセトルメントは国家の崩壊とともに放棄された。旧世界と比較すれば、国家が崩壊した後も存続する西アジアやヨーロッパの都市ではなく、国家の崩壊とともに放棄された東アジアの都城と類似している。国家の崩壊後にも利用され続けた中心遺跡（大規模なセトルメント）は先スペイン期にはない。ワカス・デ・モチェ、ティアワナコ、ワリ、チャンチャンのいずれも国家の崩壊とほぼ同時期に放棄されており、その後の国家に再利用された痕跡はない[4]。その意味で、都市と国家はそれぞれ独立しておらず、連動している。スペイン人に征服された後、インカ帝国の大規模センターは全て放棄された。同様に、高地のティワナク国家、ワリ国家に関係する大規模セトルメントは完全に放棄された。それがアンデス高地を中心とした国家の特徴、都市の特徴を示している。

ペルー北部の特に海岸地帯では、行政センターなど国家社会の施設が後続の国家社会に再利用された例はある。トゥクメ遺跡、ファルファン遺跡はシカン期からインカ期まで、タンタリカ遺跡はチムー期からインカ期までに利用された。また中央海岸の巨大な巡礼センターであるパチャカマ遺跡もインカ期に再利用された。ペルーの海岸地帯の大規模遺跡が複数の国家によって連続的に利用されたことと、モチェ、シカン、チムー、インカといった国家社会が連続的に展開したことは関係している。一方、山地で複数の国家に連続的に利用された大規模遺跡の例がないのは、そもそもワリ、ティワナクの後に大規模社会が展開しなかったからであり、インカ帝国の台頭まで400年ほどの時間があった。

国家の大規模センター（中心遺跡、行政センター）が同時に放棄されたのと同様に、形成期にも複数の神殿が連動して放棄された時期がある。形成期の神殿も海岸地帯では紀元前900–800年頃、山地では紀元前500–400年頃に複数の神殿が連動して放棄された。あくまで宗教的要因で御利益がなくなったから放棄された場合もあるし、あるいは自然災害などが契機になり、神殿を機能させるための更新活動ができなくなったからという理由もあるであろう。

V　物質と儀礼

インカ帝国における信仰の基本はワカ崇拝であった。ワカとは岩や泉など具体的な物体である。ワカ崇拝が基本であったため、信仰は特定の場に収斂する傾向があった。つまり神という抽象的な概念が先にあり、それを具現化する建物が作られた訳ではなく、信仰の

4　インカ帝国のクスコはスペインの植民地に入り、大規模に破壊されたが一部の建物が再利用された。

対象が特定の場に固定されていた。そのため、大規模遺跡が神殿を内包することは、神殿の場所が最初から固定されているということと整合的である。キリスト教の教会などのように、比較的自由に場所を選択できるわけではない。大規模遺跡に神殿が含まれるということを逆に説明すれば、神殿に様々な機能が加わり、都市が形成されたということである。

都市には様々な建物が建てられた。建築を含むアンデスの物質文化は儀礼的活動を通して高度に発達した。信仰対象のワカが物質そのものであり、物質にはカマイという力が宿っており、カマイの力に寄り添うことで建物の建設や工芸品の製作が行われた（カミンズ 2012）。インカを含む南北アメリカでは物質は主体性を持った存在であった（*cf.* ヴィヴェイロス・デ・カストロ 2016 [2005]）。つまり主体が人間ではなく物質にあると考えられた。アンデスにおける物質文化はまずもって儀礼的性格から考える必要がある。土器は酒用の器が精製土器として発達し、大量に作られた。アンデス考古学では、基本的に土器を基に文化の分類が行われている。巨大な儀礼の場である都市的空間は物質から構成され、物質はワカと結びつき、その中に人間も位置づけられている。自然と文化という二分法に従って、人間が作り出した空間としてアンデスの都市的構造を捉えることは、不適切ということになる。ワカに体現される自然の中に文化を担う人間も内包されていた（*cf.* Ramírez 2005）。

先スペイン期アンデスの諸国家では王の墓のための独立した建物が建設されることはなかった。エジプトのピラミッドや日本の古墳のような墓がなかったのである。モチェ文化の王墓はある。しかしそれは、繰り返し更新される建造物の中に組み込まれていた。例えばシパン遺跡の 1 つの建造物の中に、王墓、あるいは王に準じる人物の墓が10基以上見つかっている。またシカン文化のバタン・グランデ遺跡のロロ神殿の麓でも、豪華な副葬品を伴う墓が複数見つかっている。しかし純粋に墓のための建造物、権力を示す巨大な墓ではない。アンデスの他のワリ文化、ティワナク文化でも墓専用の基壇型の建造物は見つかっていない。そしてインカ帝国では、インカ王はミイラとして保管された。墓の中に安置されることはなかった。

同様に王の巨大な宮殿が建設されることも一般的ではなかった（Pillsbury 2004）。明確なのは、今回扱った 6 つの事例の中では、チムーの首都チャンチャンのシウダデーラのみである。インカ帝国の首都クスコにおいては、セケ・リストなどを基に特定の王と建物を結びつけることができるが、建物としての宮殿は神殿よりも小規模である。

形成期の後に成立した中央集権的社会において、社会的リーダーはその権力を宮殿や墓などの物質的媒体を用いて表現することは一般的ではなかった。立派な建造物は儀礼に関するものであり、宮殿などの建物は、神殿と比較すると目立たなかった。そのため政治的な側面を読み取るためには、墓などの建造物などの物質文化そのものではなく、労働力を動員すること自体に注目することが有効である。

インカ帝国ではモノを持つことが富の表れではなく、人を動かすことが豊かさの指標であった（*cf.* Nesbitt 2019）。その人に従う人がどれだけいるか、助ける人がどれだけいるかが富の基準であった（Ramírez 2005）。支配者は人間の労働力を使用することで権力を示し、人を常に動かしている状態こそが重要であった。そのため、多くの建物は建設途中であったし、道路を常に建設し橋を作り替えていたし、戦争を常に行っていた。また石材を長距離移動させる（Ogburn 2004a, 2004b）、山を動かすといった無駄と思えることも行っていた（シエサ・デ・レオン 2006 [1553]: 346）。儀礼的側面が特定の場に収斂するのに対し、政治的側面は外部に開くと説明することもできよう。

ワカス・デ・モチェ、ティアワナコ、バタン・グランデでは基壇型の建造物が顕著であるが、宮殿と考えられる建造物は不明瞭である。チャンチャンでは王宮と考えられるシウダデーラが10あり、より規模の小さい神殿が複数ある。ワリ遺跡ではD字形建造物が少なくとも10基はあるが、それらよりも大規模な建造物は複数存在する。つまり宗教的建造物と政治的建造物の関係性が、第 1 タイプ（ワカス・デ・モチェ、ティアワナコ、バタン・グランデ）と第 2 タイプ（ワリ、チャンチャン）の間では異なる。分析概念として宗教的特徴と政治的特徴を分離してそれらの関係を考察する際に、両者の関係が絡み合っている場合が多く、その絡み合い方をどのように記述するかが課題である。

アンデスにおける道具製作の特徴として、道具の機能分化があまり進まず、 1 つの道具が多機能であることが挙げられる（川田 2010; 渡部 2017）。それと同様にアンデスにおいては建物の機能が複合的であり、機能の分化が不十分であったのであろう。ワカス・デ・モチェ、ティアワナコ、そしてバタン・グランデでは、神殿は基壇型の目立つ建物であり複数確認できるが、

宮殿として目立つ建物があるわけではない。むしろ神殿としての建物が宮殿も兼ねていたと考えれば、宮殿も複数併存すると理解できる。ワリでは高さのある基壇型の神殿は存在せず、より平面的な構造であった。チムーの首都チャンチャンでは10のシウダデーラがあるが、神殿と考えられる建物は小規模で目立たない。インカの首都クスコでは、中心に太陽の神殿があり、その周囲に各インカ王の宮殿が位置し、神殿と宮殿がそれぞれ独立して明確に識別できる。つまり、インカ帝国では神殿と宮殿は建物として別々に存在するが、それ以前は、そもそも宮殿は目立つ建物ではなかったか、あるいは神殿と未分化であったと想定できる。都市を議論する際にどのようなカテゴリーの建造物が存在していたかを確認する必要があるが、西洋の宮殿という概念を無批判にアンデス研究に用いることは問題があることは確かである（Christie & Sarro [eds.] 2006; Evans & Pillsbury [eds.] 2004; Inomata & Houston 2018 [2001]）。

Ⅵ　競争と協同

アンデス形成期の神殿社会における複雑性はヘテラルキー（横方向の複雑性）として説明することが適切であり、その傾向は後の国家社会においても認められる。形成期社会において組織的な戦争の証拠は少なくとも早期から後期までは不明瞭である。そのため、神殿建設、神殿更新、神殿での儀礼など形成期における集団的行為のメカニズムの説明として、協同という概念を用いて考える必要がある（渡部 2019）。当然ながら、組織的な戦争も集団内での協同が認められるが、形成期神殿ではそうした組織的な戦争の証拠が希薄であるという点が特徴である。

階層性を議論する際に、戦争や争いを前提とする研究者がいる。しかし、古代アンデスの諸国家は、形成期からの連続性の上に立っている。建造物の建設、都市的空間の建設の際にはまず協同によるメカニズムがあり、そこに競争原理が加わったと言える。そして競争の本質は、例えばインカ族の王族内の争いなどの内的な競合関係であった。インカ帝国と競合する規模の国は、チムー王国征服後には存在しなかったため、外部への征服活動の過程において他集団との競合関係は明確ではなかった。首都クスコはオープンな設計であった。チャンチャン遺跡やワリ遺跡は防御的であるが、この時期に敵の存在は明確ではないため、防御的かどうかは戦争以外の要因が関係しているのであろう。

アンデスの国家社会において、協同、集合行為という概念で説明される自発的な動きをどのように担保したのか。1つの方法は酒を用いた儀礼であった。国家社会ではいずれも精製土器が作られ、それぞれの文化を特徴付けるのは酒の器であった。酒が大量に振る舞われることで、儀礼が行われ、労働への見返りとなった。政治的な活動に儀礼は欠かせなかった（*cf.* ギアツ 1990 [1980]）。

戦争がなかったわけではない。インカ帝国の遺跡は開放的であるが、インカ王は常に征服活動を行っていた。しかしアンデスでは競争の究極的な形態である戦争は、殺傷能力の高い武器、精度の高い戦法などを発展させる方向には向かわなかった。むしろ相手を殺さずに戦争を行う仕組みが強かった。その理由の1つは、アンデス全体の面積に比して人口がそれほど多くなく人口密度が低かったため、戦争の目的の1つが労働力の確保、成員の増加であったからである。戦争後も人々を土地から追い出すわけではなかったし、虐げることもなかった。そして戦争は協同として成り立っており、集合行為の1つとして解釈できる。戦争を続けること自体が目的となって儀礼化していた（渡部 2021, 2024）。

当然ながら熾烈な争いもあった。例えば王位継承をめぐるインカ族内部での争いである。しかし、そうした場合、規模はそれほど大きくはならない。そして、戦争自体は、実際に戦うと言うよりも威嚇して降伏させる方法の方が主流であったのだろう。スペイン軍と対峙したインカ軍は2万人いた。必要以上の兵士を集めることが重要であり、戦争自体が協同的な作業であり、多くの人々が集まること自体が重要であった。168人のスペイン人相手に過剰な人数を集めたのは、そうした特徴を示している。

考古学では権力を、マックス・ウェーバーの定義を引用し、相手を従わせる力、生殺与奪の権と捉える場合が多い。そのためその権力を裏付ける戦争、武力などが指標として着目されてきた。アンデスでの権力は、むしろミシェル・フーコーが主張する生権力、すなわち人間の活動を方向付ける力も加えて分析した方がより的確に理解できるであろう（*cf.* 大澤 2019: 584–591）。そしてアンデスの生権力とは、自発性を促し、導く力である。

Ⅶ　都市間・都市内の複雑性

これまで国家の特徴として階層性が強調され、国家とはすなわち階層社会とされてきた。セトルメントの規模に従って4つのレベルの階層性ができる社会を国家と見なす考えが典型的な例である（Wright & Johnson 1975）。都市に関しても、国家に伴うかどうかに関わらず、城や宮殿などの中心と、それ以外の周縁との空間的関係に、階層性が投影されて考えられてきた。

前述の通り、物質は儀礼的側面と結びつき、神殿などの建築物がアンデスでは発達した。政治的側面は人々を動かすことで示され、その結果として建設された建築物が多くある。従って、建築物の数、集中の度合いと遺跡間の階層性の間には対応関係がある。

首都と地方センターとの間の規模の差は明確である。また地方の行政センターを大規模なものと小規模なものに分けることもできる。さらに分散する住居址を加えればセトルメントの階層性は4段階以上にはなる。しかしながら、行政センターに生活する人が固定されていたかというとそうではない。そこは納税のために働く場であった。

インカ帝国は1人の王が中心となっているという点で中央集権的社会であり、インカと非インカの区別も明確である。しかしインカ族以外の人々はほぼ同じ扱いであり、上下関係を設定しにくい。インカ帝国の行政単位は、大きい方からフヌ（万）、ワランガ（千）、パチャカ（百）と10進法で区別されていた（D'Altroy 2015）。各地の行政単位は、フヌがワランガ、ワランガがパチャカに分割されるため、同じ人間が、全てのレベルの単位の成員となる。首長に関しても、パチャカの首長の1人が同時にワランガの首長でもあり、フヌの首長でもあった。つまり入れ子状の構造である。

各地の民族集団は同じような規模、性格であり、職業の分化も明確ではなく、基本的に多くの人々は農民であった。インカ帝国の支配下で人間集団の線引きがされ、それぞれの民族集団に名前がつけられた。各地の民族集団の一部を政策によって他の場所に移動させて1つの場に共存させることで多様性、複雑性が担保された。首都クスコや行政センターなど都市的空間に集合したのは、異なる民族集団出身の人々である。

インカ帝国において出身地とは異なる地域に送られた人々は、人口の4割になるという試算もある（Cobo 1964 [1653]: 109; ダルトロイ 2012: 143）。それだけ人間集団がシャッフルされていたから、人間構成の分布はかなり均質化していたとも言える。しかし単独の場に焦点を当てると複数の地域の出身者が混在していた。都市の1つの特徴が、人間集団の多様性だとすると、インカ帝国の場合は，それは政治的に移動させられた複数の民族集団の存在によった（渡部 2020）。ヨーロッパやアジアなどの都市では、多様性を担保するのは、職業、カースト、民族集団、宗教、などの違い、職業分化や身分の分化であった。また雑多な人間が集まった都市の住民が、農村の人々と対置された。インカ帝国では各地に行政センターが設置されたが、行政センターごとに人間集団が登録されたわけではなかった。そこには他の地域出身の複数の民族集団の出身の人々も集められた（ダルトロイ 2012）。1つの場に様々な場から人間が集められたのは反乱を防止するなどの目的があった。

国家社会においては、程度の差はあるが、王や首長などの支配者と、それらに従う人々の間に上下関係が認められる。そうした上下関係を保証する武力の行使も制度化されていたと言える。先スペイン期アンデスの1つの場における人間集団間の不平等は顕著ではなく、都市の複雑性の特徴の多くは、民族集団の違いなど不均質なものとして説明できる。

複雑性についてフラナリーは集中化（centralization）と分離化（segregation）（Flannery 1972）、マグワイアは不平等（inequality）と不均質（heterogeneity）という変数に分解した（McGuire 1983）。ここでは縦方向（集中性、不平等）と横方向（分離性、不均質）という言葉を使用して説明する。それらが世代を超えて受け継がれれば、それぞれヒエラルキーとヘテラルキーとして捉えられる[5]（Crumley 1995）。また、横方向だけの複雑性であれば、形成期の神殿にも認められる。形成期後期までの神殿社会では、戦争の証拠が不明瞭であり、住居の大きさや所持品の豊かさ、多さなど、他の社会で一般的に見られる差異が今のところ見つかっていない。縦方向の区分は不明瞭であるため、支配者が存在する国家社会の都市とは異なる。神官は人を従わせる力を持っていたのではなく、あくまで儀礼

5　ヘテラルキーは複数の縦方向がある場合も含むが、ここでは特に横方向に着目して使用している。

という枠組の中で役割を果たしていただけであり、捧げ物として神官のミイラが埋められた可能性も考える必要があろう。

Ⅷ　おわりに

アンデスにおける国家社会には、大規模なセトルメントが存在する。いくつかを都市と呼ぶこともできる。重要なのは、神殿の位置づけである。集中型の神殿都市であれ、分散型の神殿都市であれ、神殿の機能を担う建造物を伴う。墓もそうした建物に組み込まれる。宮殿と神殿、競争と協同、政治と宗教、という二分法を用いて説明すれば、常に後者の中に前者が組み込まれる、解消される、意味づけられるという関係がアンデスでは顕著である。そのため縦と横という比喩を用いれば、横方向の複雑性が進んだ社会である。

アンデスでは神殿が基準となり場所が固定され、神殿を中心に都市が形成された。そのため、都市なき国家は、アンデスには存在しなかった。しかし、逆に国家なき都市という可能性、つまり国家成立なしに神殿を中心とした場がより大規模化、複雑化するという可能性はあった。形成期の神殿には人々が住んでいなかったので、都市とは見なされないが、そうした場が3000年以上も維持されたことが重要である。本稿では神殿を中心とした場をどのように評価するかを検討したが、それぞれの場の動態、通時的変化を明らかにすることで、より精緻な議論をすることが今後の課題である。

謝辞

本稿は科学研究費補助金（23H00032、19H01396、19H05734、23682011、19682004）、および南山大学2024年度 I-A-2パッヘ研究奨励金の研究成果である。村上達也氏からは本稿について極めて建設的なコメントを頂いた。記して感謝したい。

参照文献

（日本語文献）

アリアーガ、パブロ・ホセ・デ
1984 [1621] 「ピルーにおける偶像崇拝の根絶」増田義郎（訳）、『ペルー王国史』、pp. 363–606、大航海時代叢書第 II 期16、岩波書店。

泉　靖一
1966 「初めに神殿ありき―無土器時代に農業も―」『朝日新聞（夕刊）』 9月21日：5。

ヴィヴェイロス・デ・カストロ、エドゥアルド
2016 [2005] 「アメリカ大陸先住民のパースペクティヴィズムと多自然主義」近藤宏（訳）、『現代思想』44(5): 41–79。

大貫　良夫・加藤　泰建・関　雄二
2010 『古代アンデス―神殿から始まる文明―』朝日新聞出版。

大澤　真幸
2019 『社会学史』講談社。

オチャトマ・パラビシノ、ホセ & マルタ・カブレラ・ロメロ
2024 「アンデスの初期帝国ワリの新しい証拠と知見」吉川主浩・南智博（訳）、『年報人類学研究』15: 23–56.

加藤　泰建
1993 「アンデス形成期の祭祀建築」『民族藝術』9: 37–48。
2010 「大神殿の出現と変容するアンデス社会―形成期後期のクントゥル・ワシ社会―」『古代アンデス―神殿から始まる文明―』大貫良夫・加藤泰建・関雄二（編）、pp. 105–152、朝日新聞出版。

加藤　泰建・関　雄二（編）
1998 『文明の創造力―古代アンデスの神殿と社会―』角川書店。

カミンズ、トマス
2012年 「インカの美術」武井摩利（訳）、『インカ帝国―研究のフロンティア―』島田泉・篠田謙一（編）、pp. 209–239、東海大学出版会。

河江　肖剰
2015 『ピラミッド・タウンを発掘する』新潮社。

川田　順造
2010 『文化を交叉させる―人類学者の眼―』青土社。

ギアツ、クリフォード
1990 [1980] 『ヌガラ―19世紀バリの劇場国家―』小泉潤二（訳）、みすず書房。

ギデンズ、アンソニー
1989 [1979] 『社会理論の最前線』友枝敏雄・今田高俊・森重雄（訳）、ハーベスト社。

坂井　正人
2003 「チムー王都の空間構造―先スペイン期アンデスにおける情報の統御システム―」『古代王権の誕生 II ―東南アジア・南アジア・アメリカ大陸編―』角田文衛・上田正昭（監修）、pp. 247–265、角川書店。

シエサ・デ・レオン、ペドロ
2006 [1553] 『インカ帝国史』増田義郎（訳）、岩波書店。

島田　泉・篠田　謙一・小野　雅弘（編）
2009 『黄金の都シカン』TBS テレビ。

関　雄二
2006 『古代アンデス―権力の考古学―』京都大学学術出版会。

2010 「古代アンデス文明とは何か—神殿から読み解く—」『古代アンデス—神殿から始まる文明—』大貫良夫・加藤泰建・関雄二（編）、pp. 9–54、朝日新聞出版。
2015 「古代アンデスにおける神殿の登場と権力の発生」『古代文明アンデスと西アジア　神殿と権力の生成』関雄二（編）、pp. 125–166、朝日新聞出版。
2021 [1997] 『アンデスの考古学（新版）』同成社。
ダルトロイ、テレンス・N.
2012 「インカ帝国の経済基盤」竹内繁（訳）、『インカ帝国—研究のフロンティア—』島田泉・篠田謙一（編）、pp. 121–149、東海大学出版会。
藤本　強
2007 『都市と都城』同成社。
フュステル・ド・クーランジュ、ヌマ・ドニ
1995 [1864] 『古代都市』田辺貞之助（訳）、白水社。
マコフスキ、クリストフ
2012 「都市と祭祀センター—アンデスにおける都市化ついての概念的挑戦—」渡部森哉（訳）、『年報人類学研究』2: 1–66。
増田　義郎・山口　敏・島田　泉（編）
1994 『黄金の都　シカン発掘展』TBS テレビ。
三宅　裕
2015 「西アジアにおける神殿の出現—新石器時代の公共建造物をめぐって—」『古代文明アンデスと西アジア—神殿と権力の生成—』関雄二（編）、pp. 41–86、朝日新聞出版。
ラインハルト、ヨハン
2007 [2005] 『インカに眠る氷の少女』畔上司（訳）、二見書房。
渡部　森哉
2010 『インカ帝国の成立—先スペイン期アンデスの社会動態と構造—』春風社。
2013 「アンデス文明形成期の神殿社会」『人類学研究所研究論集』1: 33–52。
2014 「ワリ帝国の行政センターと地方統治—ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡の事例—」『古代アメリカ』17: 25–52。
2016 「崩壊と再生—古代アンデス諸社会の事例—」『人類学研究所研究論集』3: 4–20。
2017 「アンデス的特徴に関する考察」『古代アメリカ』20: 57–78。
2019 「文明の誕生—古代アンデスの事例から—」『史林』102(1): 7–39。
2020 「首都と地方社会—古代アンデス諸国家における在地性について—」『人類学研究所研究論集』9: 114–134。
2021 「戦争と儀礼—古代アンデスの事例—」『年報人類学研究』12: 197–217。
2024 『インカ帝国　歴史と構造』中央公論新社。

（欧文文献）
Agurto Calvo, Santiago
1980 *Cusco: la traza urbana de la ciudad inca*. Lima: Instituto Nacional de Cultura del Perú.
Alva Meneses, Ignacio
2012 *Ventarrón y Collud: origen y auge de la civilización en la costa norte del Perú*. Lima: Ministerio de Cultura del Perú.
Alva, Walter & Christopher B. Donnan
1993 *Tumbas Reales de Sipán*. Los Angeles: Fowler Museum of Cultural History, University of California.
Bawden, Garth
1996 *The Moche*. Oxford: Blackwell Publishers.
Bermann, Marc
1994 *Lukurmata: Household Archaeology in Prehispanic Bolivia*. Princeton: Princeton University Press.
Billman, Brian R.
1996 *The Evolution of Prehistoric Political Organizations in the Moche Valley, Peru*. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of California, Santa Barbara.
Bourget, Steve
2016 *Sacrifice, Violence, and Ideology among the Moche: The Rise of Social Complexity in Ancient Peru*. Austin: University of Texas Press.
Bragayrac D., Enrique
1991 Archaeological Excavations in the Vegachayoq Moqo Sector of Huari. In *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*. W. H. Isbell & G. F. McEwan (eds.), pp. 71–80. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
Burger, Richard L.
1983 Pójoc and Waman Wain: Two Early Horizon Villages in the Chavín Heartland, *Ñawpa Pacha* 20: 3–40.
1992 *Chavín and the Origins of Andean Civilization*. London: Thames & Hudson.
Burger, Richard L. & Lucy C. Salazar
2012 Monumental Public Complexes and Agricultural Expansion on Peru's Central Coast during the Second Millennium BC. In *Early New World Monumentality*. R. L. Burger & R. M. Rosenswig (eds.), pp. 399–430. Gainesville: University Press of Florida.
2014 ¿Centro de qué? Los sitios con arquitectura pública de la cultura Manchay en la costa central del Perú. In *El centro ceremonial andino: nuevas perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo*. Y. Seki (ed.), pp. 291–313. Senri Ethnological Studies 89. Osaka: Museo Nacional de Etnología.
Cabrera Romero, Martha & José Ochatoma Paravicino
2019 Arquitectura funeraria y ritual en el sector de Monqa-

chayuq, Wari, *Research Papers of the Anthropological Institute* 8: 46–92.

Campana Delgado, Cristóbal
2006 *Chan Chan del Chimo: estudio de la ciudad de adobe más grande de América antigua*. Lima: Editorial Orus S.A.C.

Cavallaro, Raffael
1991 *Large-Site Methodology: Architectural Analysis and Dual Organization in the Andes*. Calgary: Department of Anthropology, University of Calgary.

Cervantes Quequezana, Gabriela
2020 *Urban Layout and Sociopolitical Organization in Sicán, Perú*. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Pittsburgh, Pittsburgh.
2024 Demographic Districts and Segmentary Sociopolitical Integration in the Multicentric Urban Settlement of Sicán, Perú. In *Neighborhood and District Integration in the Andes and Mesoamerica*. G. Cervantes Quequezana & J. P. Walden (eds.), pp. 245–271. Pittsburgh: Center for Comparative Archaeology, University of Pittsburgh.

Chapdelaine, Claude
2002 Out in the Streets of Moche: Urbanism and Sociopolitical Organization at a Moche IV Urban Center. In *Andean Archaeology I: Variations in Sociopolitical Organization*. W. H. Isbell & H. Silverman (eds.), pp. 53–88. New York: Kluwer Academic / Plenum Publishers.
2009 Domestic Life in and around the Urban Sector of the Huacas of Moche Site, Northern Peru. In *Domestic Life in Prehispanic Capitals: A Study of Specilization, Hierarchy, and Ethnicity*. L. R. Manzanilla & C. Chapdelaine (eds.), pp. 181–196. Ann Arbor: The Museum of Anthropology, University of Michigan.
2011 Recent Advances in Moche Archaeology, *Journal of Archaeological Research* 19: 191–231.

Childe, Gordon V.
1950 The Urban Revolution, *Town Planning Review* 21(1): 3–17.

Christie, Jessica Joyce & Patricia Joan Sarro (eds.)
2006 *Palaces and Power in the Americas: From Peru to the Northwest Coast*. Austin: University of Texas Press.

Cobo, Bernabé
1964 [1653] *Historia del Nuevo Mundo*. Biblioteca de Autores Españoles, tomos 91–92. Madrid: Ediciones Atlas.

Conlee, Christina A.
2016 *Beyond the Nasca Lines: Ancient Life at La Tiza in the Peruvian Desert*. Gainesville: University Press of Florida.

Conrad, Geoffrey W.
1982 The Burial Platforms of Chan Chan: Some Social and Political Implications. In *Chan Chan: Andean Desert City*. M. E. Moseley & K. C. Day (eds.), pp. 87–117. Albuquerque: University of New Mexico Press.

Conrad, Geoffrey W. & Arthur A. Demarest
1984 *Religion and Empire: The Dynamics of Aztec and Inca Expansionism*. Cambridge: Cambridge University Press.

Cook, Anita G.
2001 Huari D-shaped Structures, Sacrificial Offerings, and Divine Rulership. In *Ritual Sacrifice in Ancient Peru*. E. P. Benson & A. G. Cook (eds.), pp. 137–163. Austin: University of Texas Press.

Crumley, Carole L.
1995 Heterarchy and the Analysis of Complex Societies. In *Heterarchy and the Analysis of Complex Societies*. R. M. Ehrenreich, C. L. Crumley & J. E. Levy (eds.), pp. 1–6. Archeological Papers of the American Anthropological Association No. 6. Arlington, Virginia: American Anthropological Association.

D'Altroy, Terence N.
2015 *The Incas*. Second Edition. Malden & Oxford: WILEY Blackwell.

Davies, Nigel
1995 *The Incas*. Boulder: University Press of Colorado.

Dietler, Michael
2001 Theorizing the Feast: Rituals of Consumption, Commensal Politics, and Power in African Contexts. In *Feasts: Archaeological and Ethnographic Perspectives on Food, Politics, and Power*. M. Dietler & B. Hayden (eds.), pp. 65–114. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.

Dillehay, Tom D. (ed.)
1995 *Tombs for the Living: Andean Mortuary Practices*. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Donnan, Christopher B.
2007 *Moche Tombs at Dos Cabezas*. Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology, University of California.
2014 Huaca Dos Cabezas, *Ñawpa Pacha* 34(2): 117–146.

Donnan, Christopher B. & Guillermo A. Cock (eds.)
1986 *The Pacatnamu Papers, Volume 1*. Los Angeles: The Cotsen Institute of Archaeology Press.

Evans, Susan Toby & Joanne Pillsbury (eds.)
2004 *Palaces of the Ancient New World*. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Flannery, Kent V.
1972 The Cultural Evolution of Civilizations, *Annual Review of Ecology and Systematics* 3: 399–426.

Fuchs, Peter R., Renate Patzschke, Claudia Schmitz, Germán Yenque & Jesús Briceño
2008 Investigaciones arqueológicas en el sitio de Sechín Bajo, Casma, *Boletín de Arqueología PUCP* 10 [2006]: 111–135.

Fuchs, Peter R., Renate Patzschke, Germán Yenque & Jesús Briceño
2010 Del Arcaico Tardío al Formativo Temprano: las investigaciones en Sechín Bajo, valle de Casma, *Boletín de Arqueología PUCP* 13 [2009]: 55–86.

Ghezzi, Ivan
2006 Religious Warfare at Chankillo. In *Andean Archaeology III: North and South*. W. H. Isbell & H. Silverman (eds.), pp. 67–84. New York: Springer.

Goldstein, Paul S.
1993 Tiwanaku Temples and State Expansion: A Tiwanaku Sunken-Court Temple in Moquegua, Peru, *Latin American Antiquity* 4(1): 22–47.

Green, Adams S.
2021 Killing the Priest-King: Addressing Egalitarianism in the Indus Civilization, *Journal of Archaeological Research* 29: 153–202.

Guaman Poma de Ayala, Felipe
1987 [ca. 1615] *Nueva Crónica y Buen Gobierno*. Edición, introducción y notas de John V. Murra, Rolena Adorno y Jorge L. Urioste. Crónicas de América. Núm. 29a-b-c. Madrid: Historia 16.

Heyerdahl, Thor, Daniel H. Sandweiss & Alfredo Narváez
1995 *Pyramids of Túcume: The Quest for Peru's Forgotten City*. London: Thames and Hudson.

Inomata, Takeshi & Stephen D. Houston
2018 [2001] Opening the Royal Maya Court. In *Royal Courts of the Ancient Maya. Volume 1: Theory, Comparison, and Synthesis*. T. Inomata & S. D. Houston (eds.), pp. 3–23. New York: Routledge.

Isbell, William H.
1991 Huari Administration and the Orthogonal Cellular Architecture Horizon. In *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*. W. H. Isbell & G. F. McEwan (eds.), pp. 293–315. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
2001 Huari: crecimiento y desarrollo de la capital imperial. In *Wari: arte precolombino peruano*. L. Millones (ed.), pp. 99–172. Sevilla: Fundación El Monte.
2002 Reflexiones finales, *Boletín de Arqueología PUCP* 5 [2001]: 455–479.
2004 Palaces and Politics in the Andean Middle Horizon. In *Palaces of the Ancient New World*. S. T. Evans & J. Pillsbury (eds.), pp. 191–246. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
2009 Huari: A New Direction in Central Andean Urban Evolution. In *Domestic Life in Prehispanic Capitals: A Study of Specialization, Hierarchy, and Ethnicity*. L. R. Manzanilla & C. Chapdelaine (eds.), pp. 197–219. Ann Arbor: The Museum of Anthropology, University of Michigan.

Isbell, William H., Christine Brewster-Wray & Linda E. Spickard
1991 Architecture and Spatial Organization at Huari. In *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*. W. H. Isbell & G. F. McEwan (eds.), pp. 19–53. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Jackson, Margaret A.
2004 The Chimú Sculptures of Huacas Tacaynamo and El Dragon, Moche Valley, Perú, *Latin American Antiquity* 15(3): 298–322.

Janusek, John Wayne
2008 *Ancient Tiwanaku*. Cambridge: Cambridge University Press.
2009 Residence and Ritual in Tiwanaku: Hierarchy, Specialization, Ethnicity, and Ceremony. In *Domestic Life in Prehispanic Capitals: A Study of Specialization, Hierarchy, and Ethnicity*. L. R. Manzanilla & C. Chapdelaine (eds.), pp. 159–179. Ann Arbor: The Museum of Anthropology, University of Michigan.

Jennings, Justin & Timothy Earle
2016 Urbanization, State Formation, and Cooperation: A Reappraisal, *Current Anthropology* 57(4): 474–493.

Joyce, Rosemary A.
2004 Unintended Consequences? Monumentality as a Novel Experience in Formative Mesoamerica, *Journal of Archaeological Method and Theory* 11(1): 5–29.

Kato, Yasutake
2014 Kuntur Wasi: un centro ceremonial del Período Formativo Tardío. In *El centro ceremonial andino: nuevas perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo*. Y. Seki (ed.), pp. 159–174. Osaka: Museo Nacional de Etnología.

Kaulicke, Peter
2014 Memoria y temporalidad en el Período Formativo centroandino. In *El centro ceremonial andino: nuevas perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo*. Y. Seki (ed.), pp. 21–50. Osaka: Museo Nacional de Etnología.

Kolata, Alan Louis
1982 Chronology and Settlement Growth at Chan Chan. In *Chan Chan: Andean Desert City*. M. E. Moseley & K. C. Day (eds.), pp. 67–85. Albuquerque: University of New Mexico Press.

1990 The Urban Concept of Chan Chan. In *The Northern Dynasties: Kingship and Statecraft in Chimor*. M. E. Moseley & A. Cordy-Collins (eds.), pp. 107–144. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

1993 *The Tiwanaku: Portrait of an Andean Civilization*. Cambridge MA & Oxford UK: Blackwell.

Koons, Michele L. & Bridget A. Alex

2014 Revised Moche Chronology Based on Bayesian Models of Reliable Radiocarbon Dates, *Radiocarbon* 56(3): 1039–1055.

Larco Hoyle, Rafael

1938 *Los Mochicas (Tomo 1)*. Lima: Casa Editorial.

1939 *Los Mochicas (Tomo 2)*. Lima: Empresa Edtitorial "Rimac" S.A.

Lau, George F.

2010 *Ancient Community and Economy at Chinchawas (Ancash, Peru)*. New Haven: Yale University Press.

Manzanilla, Linda

1992 *Akapana: una pirámide en el centro del mundo*. México, D.F.: Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México.

Matsumoto, Yuichi

2019 South of Chavín: Initial Period and Early Horizon Interregional Interactions between the Central Highlands and South Coast. In *Perspectives on Early Andean Civilization in Peru: Interaction, Authority, and Socioeconomic Organization during the First and Second Millennia BC*. R. L. Burger, L. C. Salazar & Y. Seki (eds.), pp. 173–188. New Haven: Yale University Press.

McAnany, Patricia A. & E. Christian Wells

2008 Toward a Theory of Ritual Economy. In *Dimensions of Ritual Economy*. E. C. Wells & P. A. McAnany (eds.), pp. 1–16. Bingley: Emerald Group Publishing.

McEwan, Gordon F.

1990 Some Formal Correspondences between the Imperial Architecture of the Wari and Chimu Cultures of Ancient Peru, *Latin American Antiquity* 1(2): 97–116.

McGuire, Randall H.

1983 Breaking Down Cultural Complexity: Inequality and Heterogeneity, *Advances in Archaeological Method and Theory* 6: 91–142.

McIntosh, Susan Keech

1999 Pathways to Complexity: An African Perspective. In *Beyond Chiefdoms: Pathways to Complexity in Africa*. S. K. McIntosh (ed.), pp. 1–30. Cambridge: Cambridge University Press.

Meddens, Frank & Anita G. Cook

2001 La administración wari y el culto a los muertos: Yako, los edificios en forma "D" en la sierra sur-central del Perú. In *Wari: arte precolombino peruano*. L. Millones (ed.), pp. 213–228. Sevilla: Fundación El Monte.

Millaire, Jean-François

2004 The Manipulation of Human Remains in Moche Society: Delayed Burials, Grave Reopening, and Secondary Offerings of Human Bones on the Peruvian North Coast, *Latin American Antiquity* 15(4): 371–388.

Moseley, Michael E. & Alana Cordy-Collins (eds.)

1990 *The Northern Dynasties: Kingship and Statecraft in Chimor*. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Murra, John V.

1980 [1956] *The Economic Organization of the Inka State*. Research in Economic Anthropology, Supplement 1. Greenwich: JAI Press.

2002 *El mundo andino: población, medio ambiente y economía*. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Instituto de Estudios Peruanos.

Narváez, Alfredo & Bernarda Delgado (eds.)

2011 *Huaca Las Balsas de Túcume: arte mural Lambayeque*. Lima: Museo de Sitio Túcume.

Nesbitt, Jason

2019 Wealth in People: An Alternative Perspective on Initial Period Monumental Architecture from the Caballo Muerto Complex. In *Perspectives on Early Andean Civilization in Peru: Interaction, Authority, and Socioeconomic Organization during the First and Second Millennia BC*. R. L. Burger, L. C. Salazar & Y. Seki (eds.), pp. 1–17. New Haven: Yale University Press.

Ochatoma Paravicino, José & Martha Cabera Romero

2023 *Wari: precursores de los imperios andinos*. Ayacucho: Fondo Editorial de la Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga.

Ogburn, Dennis

2004a Evidence for Long-Distance Transportation of Building Stones in the Inka Empire, from Cuzco, Peru to Saraguro, Ecuador, *Latin American Antiquity* 15(4): 419–439.

2004b Power in Stone: The Long-Distance Movement of Building Blocks in the Inca Empire, *Ethnohistory* 51(1): 101–135.

Onuki, Yoshio (ed.)

1995 *Kuntur Wasi y Cerro Blanco: dos sitios del Formativo en el norte del Perú*. Tokyo: Hokusen-Sha.

Parkinson, William A. & Michael L. Galaty

2007 Secondary States in Perspective: An Integrated Approach to State Formation in the Prehistoric Aegean, *American Anthropologist* 109(1): 113–129.

Pillsbury, Joanne
2004 The Concept of the Palace in the Andes. In *Palaces of the Ancient New World*. S. T. Evans & J. Pillsbury (eds.), pp. 181–189. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Polo Ondegardo, Juan
1916 [1559] Instrvcion contra las ceremonias y ritos que vsan los indios conforme al tiempo de su infidelidad. In *Informaciones acerca de la religión y gobierno de los incas*. H. H. Urteaga & C. A. Romero (eds.), pp. 189–203. Colección de Libros y Documentos Referentes a la Historia del Perú, 1ra. Serie, Tomo III. Lima.
2012 [1559] Los errores y supersticiones de los Indios sacadas del Tratado y averiguación que hizo el licenciado Polo. In *Pensamiento colonial crítico: textos y actos de Polo Ondegardo*. G. Lamana Ferrario (ed.), pp. 343–363. Lima: Instituto Francés de Estudios Andinos, Cuzco: Centro de Estudios Regionales Andinos Bartolomé de Las Casas.

Pozorski, Shelia & Thomas Pozorski
1987 *Early Settlement and Subsistence in the Casma Valley, Peru*. Iowa City: University of Iowa Press.

Pozorski, Thomas
1982 Early Social Stratification and Subsistence Systems: The Caballo Muerto Complex. In *Chan Chan: Andean Desert City*. M. E. Moseley & K. C. Day (eds.), pp. 225–253. Albuquerque: University of New Mexico Press.

Price, Barbara
1978 Secondary State Formation: An Explanatory Model. In *Origins of the State: The Anthropology of Political Evolution*. R. Cohen (ed.), pp. 161–186. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues.

Protzen, Jean-Pierre & Stella Nair
2002 The Gateways of Tiwanaku: Symbols or Passages? In *Andean Archaeology II: Art, Landscape, and Society*. H. Silverman & W. H. Isbell (eds.), pp. 189–223. New York: Kluwer Academic / Plenum Publishers.

Quilter, Jeffrey
2002 Moche Politics, Religion, and Warfare, *Journal of World Prehistory* 16(2): 145–195.

Quilter, Jeffrey & Luis Jaime Castillo B. (eds.)
2010 *New Perspectives on Moche Political Organization*. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Ramírez, Susan Elizabeth
2005 *To Feed and Be Fed: The Cosmological Bases of Authority and Identity in the Andes*. Stanford: Stanford University Press.
2007 It's All in a Day's Work: Occupational Specialization on the Peruvian North Coast, Revisited. In *Craft Production in Complex Societies: Multicraft and Producer Perspectives*. I. Shimada (ed.), pp. 262–280. Salt Lake City: The University of Utah Press.

Renfrew, Colin
1986 Introduction: Peer Polity Interaction and Socio-political Change. In *Peer Polity Interaction and Socio-political Change*. C. Renfrew & J. F. Cherry (eds.), pp. 1–18. Cambridge: Cambridge University Press.

Rowe, John Howland
1967 What Kind of a Settlement Was Inca Cuzco? *Ñawpa Pacha* 5: 59–76.

Sakai, Masato
1998 *Reyes, estrellas y cerros en Chimor : el proceso de cambio de la organización espacial y temporal en Chan Chan*. Lima: Editorial Horizonte.

Salomon, Frank
1991 Introductory Essay: The Huarochirí Manuscript. In *The Huarochirí Manuscript: A Testament of Ancient and Colonial Andean Religion*. F. Salomon & G. L. Urioste (eds.), pp. 1–38. Austin: University of Texas Press.

Seki, Yuji
2014 La diversidad del poder en la sociedad del Período Formativo: Una perspectiva desde la sierra norte. In *El centro ceremonial andino: nuevas perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo*. Y. Seki (ed.), pp. 175–200. Osaka: Museo Nacional de Etnología.

Shady Solís, Ruth
2014 La civilización Caral: Paisaje cultural y sistema social. In *El centro ceremonial andino: nuevas perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo*. Y. Seki (ed.), pp. 51–103. Osaka: Museo Nacional de Etnología.

Shibata, Koichiro
2019 Interregional Competition and Interregional Reciprocity: Formative Social Organization in the Lower Nepeña Valley on the North-central Coast. In *Perspectives on Early Andean Civilization in Peru: Interaction, Authority, and Socioeconomic Organization during the First and Second Millennia BC*. R. L. Burger, L. C. Salazar & Y. Seki (eds.), pp. 35–47. New Haven: Yale University Press.

Shimada, Izumi
1994 *Pampa Grande and the Mochica Culture*. Austin: University of Texas Press.
2000 [1992] The Late Prehispanic Coastal States. In *The Inca World: The Development of Pre-Columbian Peru, A.D. 1000–1534*. L. Laurencich Minelli (ed.), pp. 49–110. Norman: University of Oklahoma Press.

Shimada, Izumi (ed.)
2014 *Cultura Sicán: esplendor preincaico de la costa norte*. Lima: Fondo Editorial del Congreso del Perú.

Shimada, Izumi & James L. Fitzsimmons (eds.)
2015 *Living with the Dead in the Andes*. Tucson: University of Arizona Press.

Stanish, Charles
2001 The Origin of State Societies in South America, *Annual Review of Anthropology* 30: 41–64.

Topic, John R.
1982 Lower-Class Social and Economic Organization at Chan Chan. In *Chan Chan: Andean Desert City*. M. E. Moseley & K. C. Day (eds.), pp. 145–175. Albuquerque: University of New Mexico Press.

Trever, Lisa
2022 *Image Encounters: Moche Murals and Archaeo Art History*. Austin: University of Texas Press.

Uceda Castillo, Santiago
2010 Theocracy and Secularism: Relationships between the Temple and Urban Nucleus and Political Change at the Huacas de Moche. In *New Perspectives on Moche Political Organization*. J. Quilter & L. J. Castillo B. (eds.), pp. 132–158. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Vega-Centeno, Rafael
2010 Cerro Lampay y el Arcaico Tardío de la costa norcentral. In *Arqueología en el Perú: nuevos aportes para el estudio de las sociedades andinas prehispánicas*. R. Romero Velarde & T. Pavel Svendsen (eds.), pp. 1–11. Lima: Facultad de Humanidades, Universidad Nacional Federico Villarreal, Anheb Impresiones.

Watanabe, Shinya
2014 Sociopolitical Dynamics and Cultural Continuity in the Peruvian Northern Highlands: A Case Study from Middle Horizon Cajamarca, *Boletín de Arqueología PUCP* 16 [2012]: 105–129.
2015 *Dominio provincial en el Imperio inca*. Yokohama: Editorial Shumpusha.
2019 Dominio provincial wari en el Horizonte Medio: el caso de la sierra norte del Perú, *Research Papers of the Anthropological Institute* 8: 230–256.

Wright, Henry T. & G. A. Johnson
1975 Population, Exchange, and Early State Formation in Southwestern Iran, *American Anthropologist* 77: 267–289.

Yoffee, Norman
2005 *Myths of the Archaic States: Evolution of the Earliest Cities, States, and Civilizations*. Cambridge: Cambridge University Press.

Temples and States in the Ancient Andean Civilization

Shinya WATANABE*

The Andean region of South America is one of the locations where primary states emerged. While it is necessary to explain the mechanisms of state formation, applying models based on Old World cases directly to the Andes is problematic. One key reason is that there was a gap of over 3,000 years between the appearance of temples—an indicator of civilization (*i.e.*, large-scale, complex societies)—and the formation of the first states.

This paper reviews the characteristics of temples from the Formative Period (3000–50 BCE) and examines their roles within the large-scale urban sites (centers) of the state societies that emerged afterward. Particular attention is given to the positioning of temples within capital sites or sites considered equivalent to capitals.

If we use the dichotomies of palace/temple, competition/cooperation, and politics/religion, it is evident that in the Andes, the latter elements (temple, cooperation, religion) were consistently more prominent. When considering the characteristics of ancient Andean societies, it is useful to distinguish between political and religious aspects and to schematically analyze their relationship.

Keywords

Andes, State, City, Temple

* Nanzan University